

〔編者解釋〕繼嗣ハ事故ナク猥リニ變易スベカラザルモノナリ茲
 ニ一人アリ三男子ヲ舉グ依テ長男ヲ繼嗣ニ定メ次男ヲ佗ハ養
 子ニ遣シタル后ナ長男死亡シタリ故ニ三男ヲシテ家督ヲ相續
 セシメタルニ其後次男養子離縁トナリテ復籍シタル如キアル
 モ三男ノ相續權ヲ次男ニ移スル能ハザルモノナラソ
 子女ナクシテ弟妹アル戸主アリ其戸主故アリテ隱居セシトキ
 ハ弟妹ノ長幼ニカ、ワラズ其戸主ノ存意又ハ親族ノ協議ニテ
 弟妹中孰レニテモ繼嗣ニ定メ家督ヲ相續サスベキナリ
 前夫ノ子女アリ而シテ後夫ノ子女モアリ然ルニ後夫戸主ナルト
 キハ其戸主ノ子女ヲ繼嗣ニ定ムル勿論ナレトモ戸主ノ存意又
 ハ親族ノ協議上ニテモ孰レニ定ムルモ差支ヘナカルベシ
 養子ヲ爲シタル后ナ一男子ヲ舉グ然ルニコノ養子死亡シ

タルヲ以テ再養子ヲ爲シ又一男子ヲ舉グコノ時相續權ハ死
 亡セシ前ノ養子ノ子ニアルヤ勿論ナレトモ佗ニ契約アルモ
 ノハ其契約ニ從フベシ又ハ親族ノ協議等ニテ相調ハザルトキ
 ハ裁判ヲ仰グノ外ナカルベシ
 實男子ノ出生セサル前キニ女子ニ婿養子ヲ爲シタリシニ故ア
 リテ養子ヲ離縁シ實家ニ復籍セシム此ノ時該家繼嗣ノ權ハ直
 ナニ實男子ニ移ルモノナリ
 實男子ヲ廢嫡シテ養子ヲ貫ヒ受ケ繼嗣ト爲ス然ル處コノ養子
 故アリテ離別シ實家ニ復籍スルモ廢嫡ノ實長男ハ直ナニ繼嗣
 權ヲ移スモノニ非ス繼嗣ト爲スヘキモノヲ佗ヨリ養子スル可
 ナルモノ、如シ

○第二款 繼嗣及相續ヲ定ムル期限

第九十六 明治十三年一月廿九日第三號布告

華士族當主死亡後相續人無之親族協議ノ上家名預リ置追テ相續人ヲ定ムルハ當主死亡後日數五十日ヲ過クヘカラス若不得止事情有之親族連印管轄廳へ延期願出ルモノハ更ニ相當ノ猶豫ヲ與フルト雖モ死亡後六ヶ月ヲ過キ仍ホ相續人ヲ届出サルトキハ其族稱ハ廢絶候儀ト可相心得此旨布告候事

第九十七 明治十七年六月十日第二十號布告

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六箇月以内ニ跡相續者ヲ届出サル者ハ総テ絶家トス

右奉 勅旨布告候事

第九十八 明治十七年六月十日第十四號布達

今般第二十號布告ヲ以テ絶家期限制定候ニ付テハ從前死亡又ハ除籍シタル者ハ該布告施行ノ日ヨリ滿六ヶ月以内ニ跡相續者ヲ届出ルコトヲ得

右布達候事

○第三款 嫡子孫ヲ措キテ佗ノ子孫ヲ以テノ繼嗣

第九十九 明治九年六月五日第五十八號達

實子アル者養子ヲ以テ相續人トシ子女アルノ寡婦夫ヲ迎ヘテ前夫ノ跡相續人ト定ムル等ハ一般難差許定規ニ候得共華士族ヲ除クノ外現實極貧或ハ老病等ニテ實子孫アリト雖モ幼少ナルカ又ハ有子ノ寡婦タリトモ極貧或ハ其子女幼少且後見スヘキ者モ無之歟ノ場合ニテ親族協議ヲ以テ願出候節不得止事情ニ係ル者ハ地方官限リ聽許不苦此

旨相達候事

〔第百〕明治十年十二月廿八日第九十九號達

平民養子相續人等ノ儀ニ付明治九年六月第五十八號ヲ以テ相達候處士族ト雖モ同様取計不苦候條此旨更ニ相達候事

〔編者本款解釋〕

嫡長ノ子孫死亡又ハ疾病ノ故ニアラズシテ放逸無賴又ハ魯鈍等ノタメ相續覺束ナキニ相違ナクハ親族會議ノ上庶幼子孫ヲ繼嗣ト爲スコト願フトキハ許可トナルベキモノナラン

聳養子ノ戸主アリ女子ヲ擧ケシ后チ其妻死亡ス依テ後妻ヲ迎ヘ男子ヲ擧ケタリ此ノ時繼嗣ノ權ハ後妻ノ生ミタル男子ニアリト雖モ血統ヲ繼カシメシメ女子ニ聳養子シテ相續セシメントスル時ハ許サル、可シ

茲ニ一戸主アリ三子ヲ有ス長チ一郎ト名ケ次チ二郎ト名ケ三チ三郎ト名ケ然ルニ一郎ハ魯鈍ニシテ一郎ノ長男係一郎(嫡孫)ハ生得ノ病身ナリ依テ相續ノ目途ナク一郎ノ夫婦及ヒ孫一郎ト共ニ或ル家ヘ養子ニ遣シタリ而シテ二郎ハ一郎孫一郎ノ廢嫡前ニ是亦タ或ル家ヘ養子ニ遣シタリ此ノ時ハ即チ三男タル三郎ヲ繼嗣トシテ相續ノ義能フモノナルベシ
女戸主アリ發狂シテ目今療養中ナリ然ルニ長男ハ幼稚ニシテ目下一家ヲ維持スルヲ能ハザルノ實情アルモノハ女戸主(發狂中)ノ印ナクトモ親族ノ協議ノ上ナラハ幼稚ノ長男ヲ廢嫡ノ義願出テ許可セラルベシ
茲ニ一女子アリ生得ノ不具ニシテ聳養子ヲ以テ妻ハスコトハ到底出來サルノ事故アリ一家中佗ニ嗣繼スベキ者モアラザルチ

ヲ以テ該不具ノ女子ヲ廢嫡セシ上ニテ養子ヲ貫ヒ受ケ之レヲ
繼嗣トスル願ハ許可セラルベシ

○第四款 除族ノ者ヲ繼嗣ト爲ス

〔編者解釋〕士族舊刑律ニテ除族セラレタルモノ士族ヘ養子ニ遣シ
タルキハ同シク士族タルベシ
除族ノ刑ニカ、リタル者ニ其ノ家ヲ相續サス時モ士族ニ復スヘ
シ此ノ時ハ養子ト稱セズシテ本體ノ續柄ヲ稱スベシ
戸主ニシテ除族トナリタル者ガ直チニ元トノ戸主ニ復スルハ難
カルベシ必ス一旦戸主ヲ定メ置キ而シテ其ノ戸主ノ相續人トナル
ハ前項ノ如シ

○第五款 嫡庶ノ區別及ヒ庶子私生子ヲ以テノ繼嗣

〔編者曰〕本款ニモ別ニ法文ノアルモノナシ依テ例ニ
據リ左ニ編者ノ解釋ヲ下シ聊カ讀者ノ參考ニ供ヘン
トス

〔編者解釋〕私生ノ子ヲ父ノ家ニ引取リタリコノ時ハ庶子ト稱ス
ベシ又タ妻妾ノ子ト長次ヲ立ルカラハ相續ハ私生ノ子ト雖モ長
男ニ當ルトモ嫡出ノ子ノ次ニ列スベキモノナルユヘ相續モ亦タ
之レニ依ルヘキ乎

妻腹ノ子ハ女ニシテ妾腹ノ子ハ男ナリ其妾腹ノ男子ヲ佗ニ養子
ニ遣ハサントスル能ハサル可シ如何トナレバ嫡出ノ男子ナキコ
リハ庶出ノ男子正當ニ相續スベキモノナレハナリ
茲ニ男女私通シテ妊娠スルアリ此ノ男女ハ終ニ正當ノ婚姻ヲ爲

シ婚姻ノ後ニ至リ分娩ス其子ハ私生子又ハ庶子ト稱セズシテ嫡出ノ子ト稱スヘキモノナラシメタルトヘ婚姻ヲ終ラザル前ニ分娩シテ一旦私生ノ子トナルモ婦女住所ノ戸長ニ許可ヲ受ケ其ノ婦ト結婚セハ其子モ嫡子ノ位ニ置クヲ得ラルヘシ

女戸主ニシテ私生子アリ然ルニコノ女戸主ニシテ嫡出ノ子ナシ正當ノ相續スベキモノモアラサルハ別ニ親族ノ協議ヲ要セストモ其私生子ニ相續セシムルヲ能フヘシ

茲ニ庶子ハ年長ニシテ嫡出ノ子ハ年少ナルアリ年長ナル庶子ニ相續セシムルトキハ一家ヲ經營シ得ベケレトモ年少ナル嫡出ノ子ニ相續セシムルトキハ支障掛ナカラサル等ノ如キハ年長ナル庶子ニ相續セシムルモ願ニヨリテハ聞届ケラルベシ

○第六款 婦女繼嗣

【第百一】 明治六年一月廿二日第廿八號布告ノ内

當主死去跡嗣子無之婦女子ノミニテ已チ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許從前ノ給祿可支給事

【第百二】 明治六年七月廿二日第二百六十三號布告ノ内

婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致シ候ハ、直ニ其夫又ハ養子ヘ相續可相讓事

【第百三】 明治六年五月卅一日第百八十四號布告

婦女子ニテ一家相續致候者ハ公私トモ他日証據ト爲スヘキモノハ自印相用可申事

〔編者解釋〕婦女子ノ相續スルハ戸主死亡ノ後ニ限ルモノナレトモ戸主ハ病氣ニ罹リ戸主タルヲ能ハズシテ退隱シ養子ヲ貫ヒ

難キトキハ婦女子ニ相續サスモ差支ヘサルヘシ
 婦女子相續ノ順序ハ親族協議ノ上ナラハ長ヨリスルモ少ヨリ
 スルモ差支ヘナカルヘシ
 夫婦ノ間ニテハ夫存生中ハ如何様ノ事情アルトモ其ノ妻ニテ
 相續スルコトハナラヌモノナリ
 甲ナル戸主ニ乙ナル男子ト丙ナル女子トアリ又乙ニ丁ナル女
 子アリ於是乎乙死亡シタルトキハ丁ハ嫡孫女ナルコトハ正當ナ
 ル承祖ナレトモ事實餘儀ナキコトアラハ願ノ上丙ニ相續セシム
 ルコト聞届ケラル、コアルヘシ但其願ハ親族協議ノ上タルヘ
 キナリ
 戸主死亡シ又ハ復籍(養子ナリ)シタル後其ノ子女アレントモ幼
 少ニシテ後見ニ立ヘキモノナキヨリ相續シ難キ時ハ情願ニヨ

リ寡婦(妻ナリ)ニ相續ヲ許サル、コアルベシ
 戸主死亡シタリシニ只一人ノ妾ノ外一ノ家族ナク養子ニ爲シ
 難キヨリ不得止時ハ其ノ遺妾ニ當分相續致サス義願ニヨリ許
 可セラレベシ但シ入籍シタル妾ニ限ルナリ是時ニ戸籍面ハ某
 亡妾某亡跡相續ト記シ追テ養子ヲ貰ヒ受ケタルトキハ養母ト
 稱スベキハ勿論ナリ
 嗣子ナキ養戸主故アリテ妻(家女)へ家督ヲ譲リ已レ實家ニ復籍
 スルハ差支ヘナキヤ勿論ナレドモ其家ニ生レタル戸主止ミナ
 キ事情アリテ夫婦離縁シ已レ(戸主)退キテ妻ニ家督ヲ譲リ已レ
 (戸主)ハ他家ノ養子又ハ相續人ト爲ラントスルコト願フトキハ
 事情ニヨリテハ聞届ケラルベシ

○第二節 相續

○第一款 通則

【第一百四】明治六年一月廿二日第廿八號布告ノ内

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト稱スヘカラス

【編者解釋】

戸主放逸無賴等ノ故ヲ以テ親族協議ノ上戸主ヲ廢シ同族中ノ者ヲ以テ家督ヲ相續セシムル時ニハ前戸主ノ尊屬及ヒ弟妹又ハ妹ニ娶ハスベキ者ハ單ニ相續人ト稱スベキモ佗ノ者ハ最初養父子ノ約ナクトモ總テ養父子ノ稱ヲ下スベキモノナルベシ

兄タル戸主死シテ其弟アルトキ其弟必ズ相續スベク弟ヲ閣キ寡婦カ相續シ又ハ寡婦ニ入夫シテ相續セシムル等ハ能ハザル

モノナルベシ

前々項ニ述ル如ク弟妹又ハ妹ニ娶ハスベキ者等ニハ養父子ノ稱ヲ下スヘカラサルモノナリ然ルニ戸主タル兄死亡セシニ非スシテ繼嗣ヲ定ムル爲メ右等ノ者ヲ後日ノ相續人ト定ムルモノ、如キハ戸籍上肩書ニ弟又ハ妹等ト記シ後日家督ヲ相續スヘキモノタルヲ額書スヘキモノナラン

戸主其妻ノ兄ヲ相續ニ貰受ルトキハ之レヲ單ニ相續人ト稱シ弟ヲ貰受ルトキハ養子ト稱スヘキモノナルベシ
一家ノ二三女ヲシテ分家セシメタル後中ノ之レニ入夫シタルトキハ夫ヨリ妻ノ父母ヲ稱スルニハ普通ノ妻ノ父母ト同稱スヘキモノナルベシ

○第二款 再相續

【第一百五】 明治六年一月廿二日第廿八號布告ノ内

當主隱居致シ實子又ハ養子家督相續致シ候上其相續人多病或ハ不埒ノ儀有之歟又ハ病死致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候節ハ聞届不苦事

但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致シ候處前當主疾病平愈又ハ事故相解候節再家督致シ右養子ハ實家へ立戻リ候歟又ハ當主佗へ繼付候共双方熟談ノ上願出候ハ、聞届不苦事

○第三款 養子相續

【編者曰】

本款ニハ明治九年第五十八號布告及ヒ明治

十年第九拾九號布告ヲ適用スヘキモノナレトモ既ニ前節第三款【第九十九】【第百】ニ載セタルユヘ重録セス就テ知ルヘシ

【參看】

明治十七年三月八日山梨縣ヨリ伺同年五月八日内務省指令

爰ニ三歳未滿ノ幼戸主家事擔保難相成事故等ヲ以テ壯年ノ者ヲ養子ニ貰受家督讓與致度旨申出ツル者アリ然ニ年長ノ者ヲ養子シテ之ヲ子ト呼ヒ又年少ノ者ヲ指シテ父ト稱スルカ如キハ實際上甚不穩當ノ様被存候得共何等據ルヘキノ法規モ無之取扱上差支候ニ付相伺候也

指令

伺之趣難聞届義ト心得ヘシ

但幼戸主疾病其他不得已事情ニ依リ他人ヲ以テ相續セシメサル

片ハ一家ノ浮沈ニ關スル等ノ類ハ親族ノ熟議ヲ以テ先代ノ養子トナシ相當ノ者ヲ貫受幼戸主ノ相續人トシテ家名ヲ繼承セシムル義ハ苦シカラス

〔編者解釋〕 譬ヘハ四十歳ノ戸主ニ嗣子ナキヲ以テ六十年ノ者養子ト爲サントス年齢顛倒シテ養父子ノ稱殊ニ笑フヘキカ如シト雖モ差支ヘナキモノナルヘシ

一女子ヲ遺シテ死亡セシ戸主アリ之レニ乙家ノ成立未定ノ男子ヲ養子ニ貫ヒ受ケ戸主ト爲シ相續セシメントス是等後見人ノアルヨリハ如何ニ幼稚ナルトモ差支ヘナカルヘシ

養子ハ幾名ヲ貫ヒ受クルモ差支ヘナキモノナリ然ルニ數名ノ養子ヲ貫ヒ受ケ未タ繼嗣ヲ定メサル前ニ戸主死亡セリ此ノ時ニ當リ嗣子ヲ定ムルハ親族ノ協議ニアル可シト雖モ其協議整

ハザルトキハ年長ノ者ニ相續セシムルモノナラン

〔編者曰〕 本款ノ解釋ハ第六章第一節ナル養子女結縁ノ部ニモ通ズルモノアリ彼是比照スベシ

○第四款 家名相續

〔編者曰〕 處刑又ハ逃亡失踪等ノ故ヲ以テ家名ヲ相續スルノコトナシト言フベカラズ是等別ニ注文ナシト雖モ聊編者ノ解釋ヲ左ニ示ス

〔編者解釋〕 刑事上コテ公權停止トナリタルモノハ分籍セシムルコ及バザレト公權ヲ剝奪セラレタルモノハ終身公權ヲ失フモノナルユヘ分籍セシメ該家ハ別ニ相續人ヲ定ムベキモノナラン戸主逃亡又ハ失踪セシトキハ二十四ヶ月ノ後ニ至リ家族ナクハ

親族協議上他ヨリ養子又ハ相續人ヲ設クベキ筈ナルモ家事ノ都合等ニテ已ムヲ得ザルモノハ十ヶ月ノ後ナラバ願出テ許可セラレ、トアルベシ

○第三節 家督相續財産

〔第一百六〕 明治八年十月九日第五百五十三號布告

家督相續或ハ贈遺等ニ依テ地所讓受候節地券書換手續左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 生存者ノ家督相續ニ由リ及ヒ総テノ贈遺親族他人ニ抱ハラ贈遺ス生存及ヒ遺囑ノ云フニ由テ讓受ケタル地所ハ其地券書換不申受旨ハ本年六月第百號布告ニ據リ處分可致事

第二條 死亡者ノ跡家督相續ニ由テ讓受タル地所ハ其讓受タル日ヨ

リ滿六ヶ月ヲ過キ地券書換ヲ不申受者ハ其地券一通ニ付証印稅地券書換証 五倍ノ科金取立地券書換可相渡事

〔編者曰〕家督相續ニ付テ不動産ノ移轉スル法律ハ夥多アノドモ戶籍上ニ用ナキヲ以テ只タ一例ヲ示シタルノミ

○第四節 雜

〔第一百七〕 明治十二年二月十三日第八號達

士族家督相續養子貫籍替ノ儀是迄管轄廳へ出願シ來リ候處自今出願ニ不及直ニ戶長へ届出シムヘシ此旨相達候事

但廢嫡ニ屬シテ特許ヲ經ヘキモノハ從前ノ通タルヘシ

〔編者曰〕 本達ハ前章ニモ通用スヘシ

○第八章 戸主廢退

○第一節 戸主ヲ辭ス

【第百八】 明治三年閏十月十九日布告

一華族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事
一士族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事

【編者曰】

思フニコノ二項ノ布告ハ現今ニ至ルニ特ニ行ハル
、モノニ非ズ第二項ノ如キハ亦ク大ニ變革アリタラン

【第百九】 明治六年一月廿二日第廿八號布告ノ内

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致シ候處前當主疾病
平愈又ハ事故相解候節再家督致シ右養子ハ實家へ立戻リ候歟又ハ
當主他へ縁付候共双方熟談ノ上願出候ハ、開届不苦事

【編者解釋】

前章第四節

【第百七】

ニ載スル如ク家督相續又ハ養子

貫籍替等ハ届ノミニテ只ク廢嫡ニ屬スル特許ヲ受クヘキ分ノ
願出ルコトセラレタリ然ルニ今茲ニ實子ナキ戸主アリ病氣
其他ノ故アルヲ以テ已レ退隱或ハ實家へ復籍(養子ナルモ)シ家
督ハ姉妹ノ婿或ハ伯叔父母又ハ母(寡婦ナリ)へ相續セシムル如
キ特許ヲ受ク可キモノニ似タリト雖モ這ハ是レ先例ノアルコ
トナレハ只ク届ノミニテ可ナルヘシ

戸主病氣其他ノ故アルヲ以テ已レ退隱シ父又ハ母コレガ再相
續ヲ爲シタル後ト前ノ戸主(再相續セシ戸主ノ長男ナリ)病氣平
愈又ハ其他ノ事故解ケタルニヨリ他家ノ養子トナリ又ハ他家
ノ相續人トナル如キハ通常ノ廢嫡トモ異ナルコトヨリ出願セス
トモ届ノミニテ可ナルヘシ

養子ニ於ケルモ前項ト同シク一旦退隱シタルトキハ年ノ長幼

實家養家タルニ拘ハラズ渾テ退隱者ト稱スベキモノナラン
右二項ハ戸主退隱ノ例ナレドモ嫡子嫡孫ノ退隱ニ於ケルモ亦
ク同一ナルベシ

戸主病氣又ハ其他ノ事故ニヨリテ病氣平愈又ハ其他ノ事故ノ
解シル迄退隱シ其父又ハ母之レガ再相續ヲ爲シ前戸主ハ長男
ノ位置ニ復スルトキハ之レヲ嗣子ト稱スベキモノナルベシ

○第二節 戸主ヲ廢ス

編者曰廢戸主ニ付テ我邦未ダ法文ヲ布カズ然レモ既ニ
司法省丁號ノ達等ノ散見スルアリ然ラバ廢戸主モ實地
ニ施行セズトハ言フ可カラズ依テ編者ハ特ニ一節ヲ設
ケテ之レガ解釋ヲ爲サントス

〔編者解釋〕戸主放逸無頼又ハ瘋癲等ニテ家事ヲ省ミス行末一家ヲ倒スノ恐レアリ又ハ犯罪ノ恐レアルトキハ本人(戸主)ニ於テ退隱スルノ存意ナシトモ親族協議ノ上ナラバ戸主ヲ廢シ退隱ノ義願出ルトキハ事情ニヨリ聽届ケラル、ナラン

前項ノ戸主養子ナルトキハ養實兩家ノ協議ニテ願出デスバナラズ若シ協議調ハズトセハ行政上ノ處分ニハ至リ難カルベキユヘ司法上ノ裁判ヲ受ケズテハナラザルベシ

舊刑律懲役一年以上實決ノ刑ヲ受ケタル者并ニ新刑法輕重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレタル戸主アリ之レニ依テ一家ノ生計營ニ難キ場合ニハ前二項ノ通りタルベキモノナラン

○第九章 家籍廢興

○第一節 家名ヲ廢ス

〔第一百十〕 明治十年八月三十一日第六十號達

男女ノ戸主 其身實子養子家女他女若シハ相續人タルヲ問ハス 其家名ヲ廢シ他ニ入夫縁付或ハ養子女トナリ又ハ實家へ後籍等願出候ハ、地方應限リ聞届不苦此旨相達候事

〔編者解釋〕甲家ノ戸主アリ該家ニハ財産ナク殆ント活路ニ困スルヲ以テ甲ノ家名ヲ廢シ乙家ハ現今絶家ナルモ幾分ノ財産アルヲ以テ乙家ヲ再興セントス是等甲乙兩家ノ親族協議ノ上出願スルニ於テハ聽許セラル、ナラン

或ル甲ナル一戸主アリ其家名ヲ廢シ或ル家ノ養子トナラントス然ルニ其甲ナル戸主ニハ隱居ノ父乙ナルモノ並ニ丙以下ノ

家族アルニヨリ乙ハ養家ノ附籍トシ丙以下ハ巳レノ家族トシ
 テ養家ニ携帶セントス是レ差支ヘサルカ乙ナル父ニ甲ノ家名
 ナ譲リタル上ハ右ノ手續ヲ願フモ許サル、ナラン
 右ノ如キ譯合ナルヲ以テ戸主單身ナルカ又ハ家族ハ皆ナ戸主
 ノ卑屬ナルトキカナラハ養家名ニ差支ヘサルヘケントモ尊屬
 ノ親アルヨリハ一應家名ハ尊屬ノ親ニ讓ルヘキモノナルヘシ
 ト信ス是等家名ノ譲リヲ受ケシ尊屬ノ親ハ附籍トスルニ止ル
 ナラン
 故ニ戸主ノ尊屬親只ター人アルモノ失踪中ニ前二項ノ取扱ヲ
 爲スニモ失踪中タリトテ之レヲ相續人ニ相立テタル上ナラデ
 ハ能ハザルヘシ

○第二節 絶家

○第一款 絶家期限

【第一百十一】明治十二年一月廿九日第三號布告

華士族當主死亡後相續人無之親族協議ノ上家名預リ置追テ相續人ヲ
 定ムルハ當主死亡後日數五十日ヲ過シヘカラス若不得已事情有之親
 族連印管轄廳ヘ延期願出ルモノハ更ニ相當ノ猶豫ヲ與フルト雖モ死
 亡後六ヶ月ヲ過キ仍ホ相續人ヲ届出サルトキハ其族稱ハ廢絶候儀ト
 可相心得此旨布告候事

【第一百十二】明治十七年六月十日第二十號布告

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六ヶ月以内ニ跡相續者ヲ届出サル
 者ハ絶家トス
 右奉 勅旨布告候事

〔第一百十三〕明治十七年六月十日第十四號布達

今般第二十號布告ヲ以テ絶家期限制定候ニ付テハ從前死亡又ハ除籍シタル者該布告施行ノ日ヨリ滿六ヶ月以内ニ跡相續者ヲ届出ルコトヲ得

右布達候事

○第二款 絶家再興及一戸新立

〔編者曰〕本款亦々共ニ法律ヲ見ザレトモ徵兵令施行ナドニハ關係ノ頗ル大ナルモノナルニハ編者ノ解釋ヲ下スコトナス宜シク第二編徵兵ニ關スル戸籍法ト參照スベシ

〔編者解釋〕養子養家ヲ離縁シテ實家ニ復籍セントスルモ實家ハ既

ニ斷絶シタルトキハ之レヲ再興スルコトヲ願フモ事ニヨリテハ一戸新立センコトヲ願フモ許可セラル、モノナルヘシ佗家へ縁付タル婦女離縁ノ場合ニ於ケル亦々之レト同一ナリ
右絶家再興ト一戸新立トハ其身ノ目的ニアルモノナルニハ姓氏ノ如キモ生家ノ苗字ヲ用ユルト用ヒサルトニハ關係ナキモノナリト知ルヘシ

〔第一百十四〕明治十七年一月十日内務省番外達

失踪逃亡死亡及絶家ノ財産ヲ戸長ニ於テ保管スルルハ財産目錄ヲ作リ郡區長ニ差出候様可致此旨相達候事

〔編者曰〕本達ハ第十章逃亡失踪ノ部及ヒ第十二章出生死亡ノ部ニモ通用スヘシ

〔編者解釋〕絶家ノ遺留財産ハ官没シテ賑恤救助ノ費途ヲ補フヘ

キモノナリ然ルニ今茲ニ一戸主財産ヲ遺シテ死亡シタルニ相
續人モナク親戚モナシ是ノ時佗人ニシテ該家ヲ襲續シ財産ヲ
繼承セントスルカ死者ト舊誼ノ者ニ保証人二名以上ヲ以テ願
出ルトキハ或ハ許可セラル、ナラン

○第三節 分家合家及ヒ其復籍

【第百十五】明治七年七月十日第七十三號布告ノ内

自今華士族分家ノ者ハ平民籍ニ編入候條此旨布告候事

【第百十六】明治九年五月二十日第七十五号布告

明治六年一月第廿八號第五項及ヒ同年八月第三百一號ヲ以テ合家ノ儀布
告候處詮儀ノ次第有之自今被禁止候條此旨布告候事
但從前既ニ合家セシ分ハ今後左之通可取扱事

七年第七
十三號布
告ハ(第
百十五)第
載ス就ニ
知ルベシ

一分家セント欲スル者ハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限り復舊スルコ
トヲ訴ス其子孫ニ至テハ七年第七十三號布告分家ノ例ニ據ルヘシ
一戸籍記載方及ヒ刑律上ノ關涉ニ於テハ戸主ノ血屬ハ等親ニ依リ其
血屬ナキハ等外親ノ親屬タルヘシ
一士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

【編者本節解釋】

華士族ニシテ最前分家セシモノ事故アリテ宗家
ヘ復籍スルトキハ元ノ華士族ニ復スルナリ其家族(分家中ニ舉
ゲシ子モ)モ共ニ復族スルナラン

寡婦ノ母タルモノ情願ニヨリ分家セントスルトキハ親族協議
ノ上ナラバ許可セラルベシ
功勳ノタメ又ハ自ラ蓄積シテ別ニ一戸ヲ立テタルモノ生家ト
ノ間柄ハ宗家分家トスルモ本家末家トスルモ相續方ノ本家繼

承等モ渾テ本人相互ノ申合ニテ可ナルベシ
 民法ノ制定ニ至ルマデハ丁年以下ノ者ニテ後見人ヲ立ルカ一
 家獨立ノ見込アルモノカハ本家ヨリ財産ヲ分與スル否ラザル
 トニ拘ハラズ慣習ニヨリテ許可セラル、トアルベシ
 分家セシモノ復籍ノ義ハ其身一代ニ限ルコトハ布告アリテ明白
 ナリ然ルニ分家セシ戸主死亡シテ其遺族即チ分家セシ時ニ戸
 主ト共ニ宗家ヲ分レタルモノハ戸主ニ非ストモ情願ニヨリテ
 ハ許可セラルベシ
 甲家ヨリ乙家ニ分レタル名稱ノ義ハ第三項ノ如ク本人相互ノ
 申合ニヨルモノナリ而シテ乙家(分家)ヨリ丙家ニ分又チ丙家ヨリ
 丁家ニ分ル、等モ別ニ成規ナキモノナルコトハ慣習ニヨリテ名
 稱ヲ付スルモ可ナルカ如シ

○第四節 就籍

【百十七】明治十五年六月廿九日内務省乙第三十九號達

無籍在監人ハ在監中定籍ノ手續ヲ爲サシムルニ及ハス本人放還ノ時
 籍ヲ望ノ地ニ定メシメ典獄ヨリ就籍地區戸長へ通知書ヲ作り本人ヲ
 シテ携帶就籍ノ手續ヲ行ハシムヘシ此旨相達候事
 但典獄ハ前年中監獄内無籍人ノ出入出生死亡ノ員數并ニ其年一月
 一日ノ現員ヲ毎年一月限り在監地區戸長へ通知スヘシ區戸長ハ之
 ヲ受ケ該地ノ人口ニ算入スヘシ

○第十章 逃亡失踪

【第一百十八】 明治十五年九月三十日第五十號布告

明治四年四月二十三日布告脱籍無産ノ輩復籍遞送規則同年六月十七日布告行旅病人取扱規則同年十二月二十六日脱籍無産ノ徒復籍方布告并ニ十年^{十二}月^{十一}日第九十五號達十一年^{十二}月^{十一}日第四十七號達同年^{十二}月^{十五}日第十五號達ハ之ヲ廢止ス
右奉 勅旨布告候事

【第一百十九】 明治十五年十二月十六日内務省乙第六十九號達

明治十一年當省乙第六十三號同十二年乙第十二號同十四年乙第二十四號達相廢シ候條此旨相達候事

【第一百二十】 明治八年一月廿日第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ三十六ヶ月ノ時間ハ取上ケサル成

例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左之通相改メ候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所へ訴出可キ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期又ハ出訴期限將ニ尽ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノコトヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨可届出事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戸長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルコト付追テ本人見當ルガ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續チ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書証書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年十一月第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サ、ル事

〔編者解釋〕失踪ノ届チ三ヶ年間怠リテ差出スモ其事實ヲ近隣ノ者ニテ保証スルニ於テハ本人失踪ノ日ヨリ失踪年月日ヲ起算スルモノナルヘシ此ノ項ハ十五年五十號布告〔第百十八〕及ヒ同年内務省乙第六十九號達〔第百十九〕ニ依テ行政上ニテハ強テ用ナキ如キモ裁判上ニテ現行法律ニテ又タ用アルモノナリ〔第百二十〕ヲ見ユ

失踪者ノ遺留財産ハ家族之ヲ保管シ家族ナキトキハ親族之ヲ保管シ親族ナキトキハ戸長之ヲ保管スルモノナリ茲ニ戸長カコノ財産ヲ保管スレバトテ只タ保存スルマデノモノナレハ書

入質公証ノ有無ニ拘ハラス渾テ裁判上ノ處分ニ任セズテハナ
ラヌモノナリ
失踪者ノ遺留財産ハ失踪者何ケ年ヲ過ギテ歸來スルモ必ス其
本人ニ返付スルモノニシテ官沒ナドノ取扱トナルモノニハア
ラザルナリ

○第十一章 後見人代人民事擔當人及ヒ財産管理人

○第一節 後見人

〔第二百一十一〕明治六年一月廿二日第廿八號布告ノ内

幼少ニテ家督爲致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相撰後見可
爲致事

〔第二百一十二〕刑法第一編第二章第三節ノ内

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

七後見人ト爲ルノ權但親屬ノ許可ヲ得テ子孫ノ爲メニスルハ此限
ニ在ラス

〔第二百一十三〕明治十六年七月十八日内務省番外達

後見人職務權限ノ儀ニ付別紙ノ通太政官へ相伺御指令相成候條爲心
得此旨相達候事

後見人職務權限ノ儀ニ付伺

後見人規則發布ノ議ハ目下急施ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上
稟シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣へ追テ一般ノ法律制定相成マ
テ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指令及ヒ來候處爾後後見職務ノ權
限伺出ル府縣夥多有之抑後見人ハ當初親族ニ於テ撰任シタルモノナ
レト常ニ監察スヘキ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動産買賣讓渡
質書入等ニ限リ其証書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戶長ニ於テ
公証ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相
伺候也

明治十六年五月卅日

內務卿 山田顯義

太政大臣三條實美殿

伺之趣聞屆候事

明治十六年七月三日

〔參看〕 明治十六年七月三日福井縣ヨリ伺同月廿一日內務省指令

第一條 甲某所有諸公債証書賣渡ノ節事故アリテ乙某ニ檢印願等

悉皆ヲ委任シ乙某都合ニ依リ其委任セラレシ証書買受候時ハ裏

面記載方甲某代理乙某ト記名シ乙某殿ト致シ候テ可然乎

第二條 証書所有者幼稚ニシテ後見人ヲ相定メ而シテ該後見人ニ

於テ其幼者ノ証書ヲ買受候節モ前條ノ手續ニテ差支無之哉

右之廉々疑惑ヲ生シ候ニ付至急何分ノ御指揮相成度此段相伺候也

指令

伺之趣左之通可相心得事

第一條 伺之通

第二條 後見人ニ於テ被後見者所有ノ公債證書ヲ讓受又ハ買受候

儀ハ不相成候

〔編者解釋〕戸主ニアラスシテ家族ノ者ニ後見人ヲ置クハ如何ノ事情アルトモ願チ公認セラル、コトナカルヘシ

戸主幼年ナル時ニ母ニ入夫セシムルトキハ入夫ニ相續セシムルコト能ハサレトモ事情ニヨリテハ入夫ヲシテ幼年戸主ノ後見人タラシムルコト能フヘシ

丁年未滿ノ戸主ニハ必ス後見ヲ置クヘキモノナレトモ幼戸主十五年以上トナリ後見ヲ要セズト親族協議上認定スルトキ後見ヲ免スルモ可ナルベシ

女戸主ト雖モ丁年以上ニ至ラハ後見人ヲ置クニ及ハザルモノナリト信ス

後見ヲ撰定スルハ戸内ノモノタルト戸外ノモノタルト親族ナ

丁年ノ事
ハ(第八
十)ヲ參
看スヘシ

ルト親族ナラザルトチ問ハズ幼者ノ身分ト財産トニ於テ益アル人物ナル所ハ差支ヘザルベシ

後見人アル幼者ノ押印ニ付テハ定リタル法律モアラザルニハ慣習ニ依テ差支ヘナカルベシ但シ後見人ニ於テ不正ノ所爲アルトキハ幼者ノ押印アルトナキトニ拘ハラズ後見人其責ヲ任ズベキモノナルベシ

士族ハ席貸業ハ爲ス可カラザルモノナリ然ルニ幼主平民ニシテ貸席業ヲ爲スモノニ士族コレガ後見タルコトハ差支ヘナカルベシト信ズ

幼戸主ノ父ハ別ニ後見ノ名稱ヲ付セズトモ自ラ後見ノ職アルベケレドモ母ニ於テハ親族ノ協議ヲ待タズテハ自ラ後見ノ職タルコト能ハザルベシ

丁年以上戸主ニハ瘋癲白痴等ニアラズンハ如何ノ事情アルモ
 後見ヲ付スルヲ能ハザルベシ
 又タ聾啞ニテ能力ヲ有セザルモノニハ後見ヲ付スルヲ能フベ
 ケレドモ盲ニハ後見ヲ付スベカラザルナリ
 幼戸主ノ後見ヲ母又ハ祖母ニテ爲スハ苦シカルマシキモ其他
 ノ婦女自家他家トモニテ後見セシメントナラハ親屬協議ノ上
 ナラハ事情ニヨリ許可セラルベシ尤モ他家ノ婦女ナルトキハ
 女戸主ニ限ルナラン
 甲家ヨリ乙家ニ分家セシモノアリ乙家ノ戸主幼少ナルヨリ甲
 家ノ戸主(幼戸主ノ實父)之レガ後見ヲリシニ乙家ノ戸主死亡
 セリ依テ甲家亡戸主ノ寡婦(幼戸主ノ實母)後見人タラントス
 然ルニ寡婦ハ戸主ニ非ズト雖モ幼戸主ノ實母ナルユヘ事情ニ

ヨリテハ親族協議ノ上願出ルトキハ許可セラル、トアルベシ
 [編者曰] 本節ニハ第五章婚姻第六章(養子女)第七章(繼嗣)相續第
 八章(戸主廢退)等ノ部ト通ズルモノアルベシ宜シク互ニ参照
 スベシ

○第二節 代人

[第二百二十四] 明治六年六月十八日第二百十五號布告

人民一般商業及ヒ其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則
 別紙ノ通被定候條此旨相達候事

代人規則

第一條 凡ソ何人ニ限ラス已レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理
 セシムルノ權アルヘシ

但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ時ハ其後見人及ヒ親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルベシ

九年四十四號布告

第三條 凡代人ハ心術正實ニシテ二十一歳以上ノ者ヲ撰ム可シ

ニテ二十歳ト改ム
（第百二十五）
チ
參看スベシ

第四條 代人ハ総理代人部理代人ノ別アリ総理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

第五條 凡本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲ント欲スル時ハ必ス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ

委任狀ハ
俾テ五厘
ノ證券印
紙ヲ貼用
スルモノ
ナリトス

別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ総理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘシ

第七條 委任狀書式左ノ通

（拙者拙者共儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ（総理代人部理代人）ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ件々ノ事ヲ代理爲致候事
一何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載スヘシ）
右代理ノ委任狀仍而如件

年號何年何月何日

住所身分

姓 名 印

後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記スヘシ

第八條 代人ヲ委任スルノ權限ハ豫メ規定シ難キモノト雖モ其本人

幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスルキハ其地方ニ新聞紙アラ
ハ之ニ記入セシメ世上ニ公布スヘシ

【第二百二十五】明治九年四月一日第四十四號布告

明治六年(六月)第二百十五號布告代人規則第三條左之通改正候條此旨
布告候事

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十歲以上ノ者ヲ撰ムヘシ

【第二百二十六】明治十四年十二月二十八日第七十三號布告ノ内

法律ニ定メタル代人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

【参看】本市ノ内

無能力者

- 一 未丁年者
- 二 妻タル者
- 三 白痴瘋癲人
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

【編者曰】本号布告ハ治罪法中定ムル所ノモノヲ列セラレタル
モノナリ

【第二百二十七】明治十六年六月廿四日司法省丁第十八號達

義務ノ證書ニ某代理某ト代人ノ名ヲ以テ捺印結約シタル者ハ權利者
ニ於テ此證書ヲ提供シ出訴スルニハ其本人ヲ相手取ル固ヨリ當然ナ
リト雖モ便宜ニ隨ヒ記名捺印シタル代人ヲ相手取ルコトアルモ必ス棄

却スルヲ要セス他ノ本人又ハ代人ヲ引合人トシテ召喚シ俱ニ之カ答
辭ヲ爲サシメ被告者ノ義務ニ歸スルキハ被告ヲシテ負擔セシメ引合
人ノ義務ニ歸スルニ於テハ引合人ヲシテ負擔セシムル様相當ノ裁判
ヲ爲シ與フヘキ筋ニ有之候條豫テ心得モ可有之候得共爲念此旨相達
候事

○第三節 民事擔當人

〔第二百二十八〕明治十四年十二月二十八日布告ノ内

民事擔當人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者

四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

〔編者曰〕 本號布告ハ治罪法中定ムル所ノモノヲ列セラレタ
ルモノナリ尙〔第二百二十六〕參看部ヲ見合スベシ

○第四節 財産管理人

〔第二百二十九〕刑法第一編第二章第三節ノ内

第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

八分散者ノ管財人ト爲リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權

〔編者曰〕 財産管理人ニ關スル法規ハ數多アレントモ戶籍上ニ
用ナキユヘ只タ左ニ一ノ解釋ヲ付スルノミ

〔編者解釋〕 受刑者ノ財産管理人ハ受刑者ニテ家族又ハ親族ノ内

ニテ撰定シ其姓名ヲ管轄ノ裁判所ニ届出ベキモノナリ後日賣買貸借等アルトキハ其裁判所ノ處分ヲ受クベキモノトス若シ財産管理ノ任ニ當ルベキ家族親族ナキトキハ戶長ニテ財産ヲ管理スベキモノナラン
其他逃亡失踪人ノ財産管理ニ付テハ第十章逃亡失踪ノ部ヲ見合スベシ

○第十二章 出生死亡

○第一節 出生

參看明治十七年三月十三日島根縣ヨリ伺同月二十九日内務省指令

出生死亡ニ關スル月表調製進達濟之後ニ至リ他出中死亡等ニテ數月ヲ經過シ原籍へ届出又ハ出生ノ兒數月數年ノ后ニ於テ届出處分濟ノ上編籍シ或ハ町村ニ於テ調製ノ際記載洩等ノ譯ヲ以テ往々引直方申出候ニ付既ニ客月七日附乾第一三一號并本月十二日附乾第三二〇號ヲ以テ開申致置候然ルニ數月前ニ溯リ引直候テハ實ニ製表上際限無之儀ニ付自今右等ノ類ハ其發覺ノ月表ニ編入シ其旨欄外へ記載進達可然哉

指令

伺之通

【第三百二十】刑法第一編第二章第三節ノ内

第十五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

【第三百二十一】刑法附則第一章ノ内

第五條 死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ検査セシメ果シテ懐胎ナル時ハ檢察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行スヘシ

【第三百二十二】刑法第三編第一章第八節ノ内

第三百三十條 懐胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條 藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條

ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以上ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條 醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等ヲ加フ

第三百三十三條 懐胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ誑騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條 懐胎ノ婦女ナルコトヲ知テ殴打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス

○第二節 私生子

第一編第十二章 出生死亡

第三百三十二 明治六年一月十八日第二十一號布告

妻妾ニ非サル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事

但男子ヨリ已レノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戸長ニ請テ免許ヲ得候者ハ其子男子ヲ父トスルヲ可得事

〔編者解釋〕私生ノ子ヲ男子ヨリ已レノ子ト認ムルトキハ父子ノ間柄タル勿論ナリ然レモ其子ハ孰レヘ編入スルモ差支ヘナカルベキナリ

右場合ニ於テ男子ノ籍ニ編入スルトキハ庶子ト稱シ私生ノ子タル稱ヲ消スベキモノナラン女子ノ籍ニ編入スルトキハ肩書某幾男女ト母ノ名ヲ記シ脇書ニ某庶子ト父ノ名ヲ記スルナラ

右ノ諸項ハ内國ノ婦女ト外國ノ男子トノ間ニ擧ケシ子ニモ通用スベシ

女戸主ニシテ私生ノ子ニ家督ヲ相續セシメントスルトキ他ニ相續スベキ親族ナキトキハ許可セラルベシ

私生ノ子アル婦人夫ヲ迎フルトモ私生ノ子ト夫トノ間ニハ父子ノ稱ヲ下スモノニアラズ去リナカラ養子トスルトキハ此ノ限リニアラザルナリ

私生ノ子ヲ庶子トシテ男子ノ籍ニ編入シタルトキ戸籍ノ順序ハ庶子中長幼ヲ別チテ嫡出ノ子ノ次ニ列スベキモノナルベシ相續ノ順序亦タ同シ

○第三節 死亡

第三百三十三 明治四年四月四日布告ノ内

人生始終ヲ詳ニスルハ切要ノ事務ニ候故ニ自今天然ヲ以テ終リ候者又ハ非命ニ死シ候者等埋葬ノ處ニ於テ其時々其由ヲ記録シ名前書員數共毎歳十一月中其管轄廳又ハ支配所ニ差出サセ十二月中辨官ニ可差出候事

右之通管内社寺ニ可觸達候事

第三百三十四 明治五年正月十三日第四號達ノ内

死者届方期限ノ事

死者埋葬所ニ於テ記録届方ノ儀毎年十二月中迄ノ分翌年二月中ニ大藏省ニ可差出事

第三百三十五 明治五年十月十日第四百四十六號大藏省達ノ内

一死者埋葬所ニ於テ記録届方ノ儀去辛未十二月御布告ノ趣モ有之候

處右埋葬所ヨリ差出候届書ノ儀ハ各府縣廳ニ差置毎年十二月中迄ノ分翌年二月中別紙雛形之通表ニ仕立差出候様可致事

別紙

某府縣死亡表

用紙美濃紙

長八寸

計		男		女	
	以下十四		以下十四		以下十四
	以上十五		以上十五		以上十五
	以上廿一		以上廿一		以上廿一
	以上四十		以上四十		以上四十
	以上六十		以上六十		以上六十
	以上八十		以上八十		以上八十
	以上		以上		以上

管内埋葬所ヨリ届出ル死者ノ員數ナレハ自他管轄ノ別ナク總テ書載スルヲ勿論ナリ故ニ獨歩旅人或ハ寄留人又ハ乞丐等ノ種類旅舍寓居路上等ニ於テ若シ發病死ニ至リ年齡不分明ナルハ篤ト死人點檢ノ上年頃相當ノ桁ニ書加ヘ可申事

但當壬申年ハ二月一日ヨリ十二月三十日迄ノ分無遺漏書載可致儀

ト可相心得事

〔第三百三十五〕明治九年二月五日內務省乙第十三號達
管内醫師施治ノ患者死亡スル時ハ左ノ書式ニ準シ遺漏ナク區戸長若
クハ區務取締ヲ經テ管廳へ爲届出半ケ年宛取纏メ二月ヲ限リ當省へ
可差出此旨相達候事

死亡届

料紙半紙二ツ折

何府何大區何小區村

何某父母兄弟妻子

何職業

病名 年号月日死

姓 名

年 齡

右ハ私施治ノ患者ニ候處死亡候間此段御届申上候也

年號月日

何府何大區何小區何村番地

醫師 姓 名 印

何縣令 何某殿

〔第三百三十六〕明治九年四月一日內務省乙第四十四號達

當省本年乙第十三號ヲ以テ患者死亡届ノ儀相達候處右届書差出方順
序醫師ヨリ直チニ差出候テハ數醫ノ施療ヲ受タル患者死亡ノ節醫師
各自届出重複シ或ハ互ニ讓合等鬧相成候儀モ可生ニ付主任ノ醫師ハ
必ス届書ヲ死者家人ニ付與スヘク家人ハ必ス之ヲ請求シテ該病家ヨ
リ區戸長或ハ醫務取締ニ爲届出候様可取計此旨更ニ相達候事

〔第三百三十七〕明治九年十月廿七日內務省乙第二百二十四號達

本年二月乙第十三號達(三府)ハ同月八日相達候(死亡届之儀往々書式ニ
照準セス職業ヲ記載セサル書面有之元來死亡届ハ土地ト職業ニ原ッ

ケル疾病ニ異同多少アルヲ查出シ豫防法講究ノ用ニ供シ候條向後例
ヘハ大工ハ大工鍛冶ハ鍛冶其他總テ本人ノ職業ヲ記載スヘク此旨更
ニ相達候事

但シ例ヘハ大工ノ家族モ他業ヲ營ミ候者ハ本人ノ職業ヲ記載シ若
シ本人無業ナレハ無業ト記シ候儀ト可相心得事

〔第三百三十八〕明治九年十二月廿八日內務省乙第三百三十九號達

本年當省乙第十三號ヲ以テ相達候死亡届書式中死者ノ住所ヲ記載ス
ルニ何府ノ下ニ(何大區何小區)トアルヲ(何國何郡)ト改正候條明治十年
一月分ヨリ右ニ照準記載候様可取計此旨相達候事

〔第三百三十九〕刑法第一編第二章第二節ノ内

第十六條 死刑ノ遺骸ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用
ヒテ葬ルヲ許サス

〔第四百一〕刑法附則第一章ノ内

第六條 死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時
ハ典獄之ヲ許可シ下付スルヲ得

〔第四百一〕明治十四年九月十九日第八十一號達監獄則第二章ノ内

第三十三條 刑死者又ハ死亡者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨ
リ本籍ノ戶長及ヒ近地ノ親屬若クハ故舊ニ通知スヘシ其監署ニ領
置シタル貨物ハ親屬ニ下付ス若シ親屬ナキトキハ遺骸ヲ領取シタ
ル故舊ニ之ヲ下付ス但死者ノ身ニ纏ヒタル衣服ハ此限ニ在ラス

〔第四百二〕明治十一年十二月廿日內務省乙第八十八號達

各地方管内ニ於テ飲食物之中毒及ヒ藥物之誤用等ニヨリ死ヲ致ス者
有之候節ハ其毒物之品名中毒之症狀並ニ死者ノ住所姓名等詳細取調
其都度當省衛生局ヘ通報可致且毒物之成分判然セサル分ハ現品相添

可差出此旨相達候事

〔第四百十三〕明治十三年七月九日第三十四號布告ノ内

第十條 虎列刺病者ノ死屍ハ其埋葬地ヲ區劃シ濫リニ雜葬セシムヘ
カラス且他ニ改葬スルヲ許サス

但火葬ハ尋常ノ燒場ニ於テシ其遺骨ハ改葬スルモ妨ナシ

第十九條 發疹室扶私病者アルキハ第十條第十一條ヲ適用シ其流行
ノ際ニハ第十二條第十三條第十四條及ヒ第十五條ヲ適用スヘシ

コノ第十
九條ハ十
三年十二
月第五十
四號布告
ノ改正文
ナリ

〔編者曰〕 傳染病ニ關シテ夥多ノ規則アレドモ戶籍上ニ用ナ
キヲ以テ略ス

〔編者本節解釋〕 胎死ノ兒ハタトヘ十ヶ月ヲ過ギタルモノナリト
モ生兒ノ數ニ加フベキモノニアラザルユヘ長次ノ男女タル稱
ハ勿論ナキモノナリ

○第四節 行旅人死亡

〔第四百十四〕明治十五年九月廿日第四十九號布告

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

行旅死亡人取扱規則

第一條 凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキハ所在戶長ハ之ヲ最寄
墓地ヘ假埋葬スヘシ其倒死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受ク
ヘシ

第二條 死亡人ノ本籍氏名詳ナルキ戶長ハ死亡ノ狀況并ニ埋葬其他
死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍戶長ヘ通報スヘシ本籍戶長ハ
之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルキハ三十日限差出サシノ埋
葬地戶長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルキハ其

本籍地方税ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三條 死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルハ戸長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場へ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルハ該費用ハ地方税ヲ以テ支辨スヘシ

第四條 死亡人所持ノ金銭ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルヲ能ハサルハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條 死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルハ之ヲ本籍へ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ケ年間戸長役場ニ保

管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方税雜收入ニ組入ルベシレ右奉 勅旨布告候事

〔第四百十五〕明治十五年十一月十七日內務省乙第六十一號達

今般第四十九號布告ヲ以テ行旅死亡人取扱規則被定候ニ付テハ明治十年五月當省乙第五十號達ヲ廢シ表式別紙ノ通相定候條右ニ照準半年分宛取纏メ毎年二月限リ進達可致尤モ届出ヘキ事項無之向ハ其旨同期限迄ニ可申出此旨相達候事

但當半季分ノ儀ハ第四十九號布告前後ヲ以テ區分ヲ立テ以前ノ分ハ最前表式ニ依リ以後ノ分ハ本達表式ニ依リ各表進達可致儀ト心得ヘシ

別紙

明治 年前後半年行旅死亡人埋葬表

○第十三章 棄兒迷子

○第一節 教育

〔第四百十六〕明治四年六月二十日布告

從來棄兒教育ノ義所預リノ分ハ養育米被下貰受人有之分ハ不被下候處自今預リ貰受ニ不拘棄兒當歳ヨリ十五歳迄年々米七斗ツ、被下候間實意養育可致事

但年限中病死ノ節ハ吟味ヲ遂ケ疑敷義モ無之候得ハ病死ノ月ヲ限リ養育米可相渡事

〔第四百十七〕明治六年四月廿五日第百三十八號布告

棄兒養育米ノ儀辛未六月中相達シ候通十五ヶ年迄年々米七斗ツ、下渡候處自今滿十三年ヲ限リ被下候條生年月日見定ノ儀ハ其所戶長等立會身體骨格等篤ト検査シ本年第三十六號布告ニ對シ年齡相定候樣可致事

〔第四百十八〕明治八年四月廿九日內務大藏兩省乙第六十三號達

昨七年十二月第百六十二號公布恤救米及棄兒養育米等都テ石代金下渡方ノ義各廳ニ於テ本人共ハ三ヶ月分ヲ取束其初月ニ後ノ兩月ヲ括シ渡方可取計且疾病等ニテ日當給米ノ分ハ凡ソ一ヶ月分ヲ其月初ニ繰リ上ケ相渡シ候義ハ不苦候條概費ヲ以テ支給シ最本年七月ヨリハ額外常費ヲ以テ可仕拂此旨相達候事

但本文三ヶ月分取束相渡シ候節ハ總テ渡ス前月ノ下米相場ヲ以テ石代給與可致候且本人病死等ノ節ハ渡過相成候分返納ニ不及候事

〔第四百十九〕明治九年三月廿四日內務大藏兩省乙第三十二號達

昨八年四月中大藏省乙第六十三號ヲ以テ恤救米及ヒ棄兒養育米等渡前月ノ平均相場ヲ以テ石代給與ノ旨相達置候處地方ノ都合ニヨリ實際交付ノ節迄ニ前月相場調製難相成事實差支候向ハ渡前々月ノ下米

平均相場相用不苦候條豫テ大藏省へ届濟可致施行此旨相達候事

〔第百五十一〕明治九年六月十七日內務大藏兩省乙第七十五號達

年額月額有之御手當金渡方ノ義ニ付テハ明治七年一月第十五號公達ノ趣モ有之候處棄兒養育米ノ義ハ來ル七月一日ヨリ全月未滿端日數ノ分ハ日割ヲ以テ支給可致此旨相達候事

但病死等ノ節渡過相成候分ハ明治八年四月兩省乙第六十三號達但書ノ通可相心得事

〔第百五十二〕明治十年五月十四日內務大藏兩省乙第五十二號達

棄兒養育致候寄留人へ養育米渡方ノ義自分寄留中ハ其寄留地ノ管轄應ヨリ可下渡此旨相達候事

〔第百五十二〕明治十四年十一月十五日大藏省乙第四十三號達

明治十三年當省乙第五號達一月一日現員表相廢シ自今十一月一日現

員表別紙雛形之通調製豫算帳一同可差出此旨相達候事

〔編者曰〕別紙雛形ハ棄兒恤救其他人員給米等ノ記載方ナレドモ略ス

〔第五百十三〕明治十六年五月廿四日内務省乙第二十三號達

棄兒増減届方ノ議ニ付テハ追々相達置候義
明治四年八月二十六日大藏省達明治九年當省乙第百十
號達モ有之候處自今別紙書式ニ照準シ每年前半年ハ八月後半年ハ翌
二月限有無共可届出此旨相達候事

但十五年後半年ハ既ニ期月經過致シ候得共猶調査ノ都合モ有之ニ付右後半年ヨリ本文ノ通相心得來ル八月前半分ト同時ニ可差出事

〔編者曰〕別紙書式ハ略ス

〔編者解釋〕棄兒齡十三年ニ至ル迄ハ戶籍面ニ棄兒ト肩書シ十三

年ヲ過グレハ實父母不詳ト肩書スモノナラン十三年以内タリトモ養子ニ貫ハレ養育米ヲ仰ガサルコ至ラハ實父母不詳トシテ棄兒ノ稱ヲ消スモノナルベシ

父母幼兒ヲ遺留シ逃亡シタルトキ之レヲ養フノ親族ナキトキハ棄兒ト同様ニ養育米ヲ下付セラル、モノナルベシ

前項ノ棄兒養子ニ貫ヒ受ルモノアルトキハ父母ノ逃亡明白ナルニ於テハ遣ハスモ差支ヘナカルベシ去リナガラ父母後日ニ至リ復歸シテ棄兒ノ養父母ノ承諾ヲ得ハ實家ニ取戻ストモ能フベシ然レドモ此ノ時ニハ先ヅ従前ノ養育料ト相當ノ費用トヲ償還セテハナラヌナリ

棄兒ヲ貫ヒ受ケタルモノ全戸失踪シタルトキハ其失踪中ハ養育米ハ下賜セラレス十三年ノ年限迄ニ復歸シタルトキハ復歸

ノ日ヨリ下賜セラレ、ナラシ
迷子アルトキハ三十日間揭示スルモ生所相分ラザルニ於テハ
棄兒ト同シク養育米ヲ下賜ルモノナレドモ茲ニ其後生所ノ分
明ナルニ於テハ其親元ヨリ養育米料ハ返納セテハナラザルベ
シ

○第二節 刑事上

〔第一百五十四〕刑法第三編第一章第九節ノ内

第三百三十六條 八歳ニ滿タサル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一
年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十七條 八歳ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寥闕無人ノ地ニ遺
棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條 給料ヲ得テ人ノ寄託ヲ受ケ保養スヘキ者前二條ノ
罪ヲ犯シタル時ハ各一等ヲ加フ

第三百三十九條 幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ癩疾ニ致シタル者ハ輕懲
役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期
徒刑ニ處ス

第三百四十條 自己ノ所有地又ハ看守ス可キ地内ニ遺棄セラレタル
幼者老疾者アルヲ知テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ
十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス
若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル
者亦同シ

○第三節 在監ノ婦女ノ携フル子

〔第一百五十五〕明治十四年九月十九日第八十一號達監獄則ノ内

第十一條 入監ノ婦女乳兒三歲未滿ヲ携帶セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス

〔參看第一〕 明治十五年十月二十七日兵庫縣ヨリ伺明治十六年七月廿一日内務省指令

第一條 拘引狀拘留狀收監狀逮捕狀ヲ執行シ若クハ重罪輕罪ノ行犯ヲ逮捕スル時ニ於テ被告人又ハ犯罪人三歳以上ノ幼兒ヲ携帶シタルキハ該兒ハ其被告人又ハ犯罪人所在地ノ戸長へ交付スルヲ順序トスル哉

第二條 果シテ前條ノ如クナレハ戸長ニ於テハ被告人及犯罪人所在地即チ其原籍ナレハ該兒ハ直ニ其親戚故舊へ引渡至當ト考量ス然ルニ若シ親戚故舊アラサル歟假令有之モ赤貧ニシテ養育之

責ニ堪へサルキハ辛未六月二十日公布及六年四月廿四日第三百十八號公布ニ據リ人ヲ需ムルモ該養育米ハ糶口ノ一端ニ止リ被服其他ノ諸費ニ充ツル能ハサルヲ以テ預リ人無之キハ養育米ノ餘ハ實費支給ヲ以テ其人ヲ需メサルヘカラス然ルキハ該費ハ官費ニ屬スヘキモノナル哉將タ地方稅救育費ニ歸スルモノナル哉

但養育年齡ハ本文公布ノ通滿十三年ヲ限界トシ可然哉

第三條 前條被告人及犯罪人所在地其原籍ニアラサルキハ直ニ原籍戸長へ送致シ而シテ該送致ニ係ル諸費ハ其原籍地ノ官費又ハ地方稅ニ歸スルモノナル哉

但無籍ナルキハ第二條ニ據テ處理ス

指令

第一條 家元又ハ親族アルモノハ之ニ引渡スヘシ其家元親族ナキモノハ伺之通

第二條 恤救規則ニ適當スルモノハ右規則ニ依リ救助シ若シ増費ヲ要スル歟又ハ該規則ニ適當セサルモノハ末文伺之通
但書 年齢ハ本文規則之通

第三條 家元又ハ親族ヲシテ引取人ヲ差出サシメ之ニ引渡スヘシ若シ引取人難差出事情アル歟又ハ無籍ナルキハ第二條指令之通取計フヘシ

〔參考第二〕明治十六年四月四日青森縣ヨリ伺同年七月廿一日内務省指令

無籍ノ犯罪人三歳以上ノ小兒ヲ携帯セルキ其子養育方ノ儀客歳九月十三日電報ヲ以テ相伺候處同月廿二日恤救規則ニ據リ支辨スヘシ

キ旨御指令ノ趣モ有之候處有籍ノ者ト雖モ原籍遠地ニアルキハ無籍者ト同シク其犯人ノ令狀ヲ受ケタル地ノ戸長ニ於テ其兒ノ養育方ヲ引受ケサルヲ得サル儀ト存候果シテ然ラハ右費用ハ犯罪者ノ親族ニテ辨償シ親族貧困ニテ難償キハ原籍町村協議費ニテ支辨シ其町村ニテ償兼候節ハ其地方稅救育費ヨリ支辨スル儀ト心得可然哉

指令
伺之趣其家元及親族共貧困ニシテ辨償シ能ハサルキハ本籍地方稅救育費ヲ以テ支辨スヘキ事

〔參考第三〕明治十六年五月四日愛知縣ヨリ伺同年七月二十一日内務省指令

監獄則第十一條ニ入監ノ婦女乳兒（三歳未滿）ヲ云フ（携帶セント請フ者ア

ルキハ之ヲ許ストアリ其三歳以上ニ至ル者ハ許サ、ル御趣意ニ有之茲ニ有籍又ハ無籍者ニテ妊娠ノ者在監中分娩ス然ルニ該兒三歳以上ニ至ルモ無籍ハ勿論有籍ノ者ト雖モ引渡スヘシ親戚モ無之トキハ有籍ノモノハ原籍戸長ヘ引渡シ無籍ノ者ハ監獄所在ノ町村ヘ就籍致サセ而ル後戸長ヘ引渡シ恤救規則第四項ニ照準シ救助取計候テ可然哉

一前條果シテ然ルキハ其町村戸長ニ於テ該兒ヲ他ヘ附托シ養育スルキハ其教育費額ニテハ物價高貴ノ際衣服等取賄フ事能ハス情勢不得止モノハ其不足費額ハ地方稅教育費ヨリ支辨シ可然哉
指令

伺之趣該兒引取人ナキモノ及本籍不分明ナル者ハ監獄則第三十條ニ準シテ處分スヘキ事

〔參考第四〕明治十六年二月廿六日滋賀縣ヨリ伺同年七月二十一日

内務省指令

生活ノ道ナキ無籍人取扱方ノ儀ニ付客年五月中庶甲第七二號ヲ以テ云々相伺候處書面伺之趣刑期滿限ニアラスシテ在監候者ハ退監セシメ其自活ノ道無キ分并ニ今后右等ノ分ハ今般第五十號布告ヲ以テ十年第九十五號達被廢候ニ付恤救規則ニ依リ救助可取計旨御指令有之然ルニ明治七年二月第百六十二號公達恤救規則ニ依リ救助可取計モノハ極貧ノモノ獨身ニシテ癡疾或ハ重病又ハ十三年以下ノモノニ限ル儀ニ有之其餘ハ規則毎項但書ニ相當スルニアラサレハ救助難致儀ニ候然ラハ生活ノ道ナキ無籍人ニシテ該規則ニ相當セサルモノ有之節ハ其處分方如何取計可申候乎
監獄則第十一條ニ入監ノ婦女乳兒三歳未滿ノモノヲ携帯セント請

フモノアルルハ之レヲ許ストアリ然ルニ其三歳以上ノモノヲ携帯
 候モノ有之節ハ直ニ親族へ下付シ生活ノ道ナキニ於テハ恤救規則
 ニ依リ救助可取計ハ勿論ニ候得共若シ其者無籍ニシテ親族等無之
 時ハ其兒童ヲ引受サスヘキモノ無之如此場合ニ於テハ如何處分致
 可然候乎
 前項兒童救助ノ儀恤救規則ニ依レハ獨身又ハ獨身ニアラサルモ家
 人七十年以上十五年以下ニテ究迫ノモノニ限ル儀ニ有之然ルニ前
 文兒童ノ儀ハ獨身ニ無之候得共其父母等入監中ハ獨身同様ノ姿ニ
 付其父母等入監中相當救助取計出監ノ上ハ直ニ給與ヲ廢止スヘキ
 儀ニ候乎
 無籍在監人ハ在監中定籍手續ヲ爲サシムルニ及ハス刑期滿限ノ后
 ト雖モ自活ノ道ナキモノハ監獄ニ留置クヘキ儀ニ有之然ルニ其携

帶兒子三歳以上ニ候節ハ携帯ヲ許可スヘカラサル儀ニ候右ノ場合
 ニ於テハ其兒子ノミ籍ヲ定メシムヘキ儀ニ候乎果シテ然ルルハ其
 定籍ノ手續如何取計可然候乎

指令

第一項 恤救規則ニ適セサルモノハ別ニ救助ノ成規ナシ

第二項 拘引ヲ受ケシ地ノ戸長ニ引渡スヘシ

第三項 伺之通

第四項 該兒ヲ引受ケシ地ノ戸籍ニ記入シ置クヘシ

【参考第五】明治十六年五月二十一日滋賀縣ヨリ伺同年七月二十一日

内務省指令

入監ノ婦女三歳以上ノ兒ヲ携帯致候儀ハ不相成儀ニ付右等ノ者有
 之節ハ嘗テ御指令ノ旨ニ依リ退監セシメタル上生活ノ道ナキモノ

ハ恤救規則ニ照シ救助可致筭ニ候ハ共右ニ付實際上多少差支ノ儀
 モ有之依テ本年二月庶甲第四十三號ヲ以テ云々伺置候次第ニ候然
 ルニ果シテ恤救規則ニ依リ救助取計候節ハ救助米高規則ニ制限有
 之則十三歳以下ノモノハ壹ケ年米七斗ノ割ニテ此代金目下當縣下
 滋賀郡ノ相場ヲ以テ算スルニ四圓三拾四錢餘(下米壹石六圓貳拾貳
 錢位)且壹日ノ米高壹合九夕餘此代金壹錢貳厘計ニ相成申候右様ノ
 次第ニ候ハ實際前文ノ金額ノミニテハ多分ノ不足ヲ來候右様ノ
 場合ニ於テハ如何取計可然哉
 指令
 伺ノ趣不足ノ費用ハ地方稅救育費ヲ以テ支辨スヘキ事
 但明治十四年十月十日付伺ハ同十五年四月廿二日及指令置候處
 該兒引取人ナキモノ及原籍不分明ナル者ハ監獄則第三十條ニ準
 シテ處分スヘシ

○第十四章 葬儀服忌

○第一節 葬儀

編者曰 本節ハ第十二章第三節ナル死刑者ノ葬儀ト參照スヘシ

第百五十六 明治五年六月廿八日第百九十二號布告

近來自葬取行候者モ有之哉ニ相聞候處向後不相成候條葬儀ハ神官僧侶ノ内ニ可相頼候事

第百五十七 明治五年六月廿八日第百九十三號布告

從來神官葬儀ニ關係不致候處自今氏子等神葬祭相頼候節ハ喪主ヲ助ケ諸事可取扱候事

第百五十八 明治七年一月廿九日第十三號布告

葬儀ハ神官僧侶ノ内ニ可相頼旨壬申六月第百九十二號布告候處自今

十五年內
 務省乙第
 七號達ニ
 テ神官教
 導職兼務
 ヲ廢シ葬
 儀ニ關係
 セサルモ
 ノトス但
 府社以下

ハ當分是
迄ノ通ト
セラル

教導職ノ輩ハ信仰ニ密葬儀相頼候儀不苦候此旨布告候事

〔第五百十九〕明治五年九月十四日教部省第十七號達

神官葬儀ニ關係之儀先般第百九十三號公布相成候ニ付テハ神葬地之儀神官ヨリ願出候ハ、適宜相應ノ地所相撰可伺出候事

但寺院内ニ神葬致度者ハ示談之上聊無差支様管内寺院ニ兼テ可相達候事

〔第六十〕明治七年十一月十八日教部省第四號布達

僧侶神葬祭兼行之儀願出聞届置候向モ有之候處詮儀ノ次第有之今後不相成候條此旨寺院ニ布達スヘキ事

〔第六十一〕明治十一年三月四日内務省乙第二十號達

舊教部省九年^一月第二號ヲ以相達候轉宗改式ノ節承認書授受ノ儀向後廢止候條渾テ壬申^六月第百九十二號七年^二月第十三號公布ノ通相心得自

今轉宗改式ノ者ハ是迄葬祭受持ノ者ニ及通知置其旨管轄廳ニ可爲届出此旨相達候事

但同宗派ニテ甲乙相轉候モ同様タルヘシ

〔第六十二〕明治八年五月二十三日第八十九號布告

明治六年^七月第二百五十三號火葬禁止ノ布告ハ自今廢シ候條此旨布告候事

〔第六十三〕明治八年六月廿四日内務省乙第八十號達

火葬ノ儀第八十九號ノ通御布告有之候ニ付テハ燒場ノ儀左ノ心得ヲ以テ取扱可申此旨相達候事

一燒場ハ東京府下ハ朱引外其他ノ地方ハ市街村落ノ外渾テ人家遠隔ノ地ニ於テ薄稅地又ハ借地料等無之地ヲ撰ニ最密市邑申合共用致サスヘク尤官有地又ハ民有地ノ内新規相設ケ候積リ取調可伺出事

九年十月
 內務省乙
 第百二十
 三號達ニ
 テ改正文
 ナ本文ニ
 載ス
 十三年十
 二月內務
 省乙第五
 十號達ニ
 テ改正文
 ナ本文ニ
 載ス

一 舊燒場(官民有地)ヲ論セス從前ノ儘使用スル土地及ヒ新規拂下タル土地ハ民有地第二種ニ可組入事
 一 燒場ハ火爐烟筒及ヒ墻壁等ヲ設クヘシ尤人家遠隔ノ山野等ニ於テハ適宜簡易ノ裝置ヲナスモ不苦候事
 一 燒場造築修繕等一切ノ入費ハ人民ノ自辨勿論ニ候得共都テ不都合無之様區戶長於テ注意取締可爲致事
 一 遺骨ヲ此場中ニ埋葬候儀ハ不相成候事

○第二節 服忌

第百六十四 明治七年十月十七日第百八號布告

服忌ノ儀追テ被仰出ノ品モ可有之候得共差向京家ノ制武家ノ制兩様ニ相成居候テハ法律上不都合有之ニ付自今京家ノ制被廢候條此旨布

告候事

第百六十五 明治五年六月十二日第百七十六號布告

僧尼服忌ノ儀ハ是迄御制度モ無之候處自今人民一般ノ服忌ヲ可受事

〔編者解釋〕

武家制服忌令ナルモノハ元祿年中改正元文中増補ノモノニシテ左ニ其ノ全文ヲ載ス但シ原文「穢ノ事」ナル部アレドモ這ハ既ニ廢セラレタルモノナレバ之レヲ略ス宜シク

第百六十六

以下ニ就テ知ルヲ得ベシ

服忌令

- | | | | |
|-------|------|-------|--------|
| 一 父母 | 忌五十日 | 服十三月 | 閏月ヲ算ヘス |
| 一 養父母 | 忌三十日 | 服百五十日 | |
- 遺跡相續或ハ分地配當ノ養子ハ實父母ノ如シ同姓ニテモ異姓ニテモ養方ノ親族實ノ如ク相互ニ服忌可受之實方ノ

親類ハ父母ハ定式ノ服忌可受之兄弟姉妹ハ相互ニ半減ノ服忌可有之此外ノ親類ハ服忌無之遺跡相續ヒス或ハ分地配當セサル養子ハ同姓ニテモ異姓ニテモ養父母ハ定式ノ通服忌可受之養方ノ兄弟姉妹ハ相互ニ半減ノ服忌可受之此外ノ親類服忌無之實方ノ親類ハ定式ノ通相互ニ服忌可受之

一 嫡母

忌十日

服三十日

對面無之候得ハ不可受服忌通路致シ候得ハ對面無之共服忌可受之父死去ノ後佗へ嫁シ或ハ父離別スルニ於テハ妾ノ子不可受服忌

但嫡母ノ親類ハ服忌無之

一 繼父母

忌十日

服三十日

初メヨリ同居セサレハ無服忌

父死去ノ後繼母佗へ嫁シ或ハ父離別スルニ於テハ不可受服忌

但シ繼父母ノ親類ニハ服忌無之

一 離別ノ母

忌五十日

服十三月閏月ナ

一 夫

忌三十日

服十三月上同算

一 妻

忌二十日

服九十日

一 嫡子

忌二十日

服九十日

家督ト定メサル時ハ末子ノ服忌可受之女子ハ最初ニ生レテモ末子ニ準ス

一 末子

忌十日

服三十日

養子ニ遺シ候テモ服忌差別ナシ家督ト定メル時ハ嫡子ノ

服忌可受之

- 一 養子 忌十日 服三十日
- 家督ト定ムル時ハ嫡子ノ服忌可受之
- 一 夫ノ父母 忌三十日 服百五十日
- 一 祖父母 忌三十日 服百五十日
- 母方 忌二十日 服九十日
- 離別セラレ候祖母モ服忌無別儀
- 一 曾祖父母 忌二十日 服九十日
- 母方ニハ服忌無之 但遠慮一日
- 一 高祖父母 忌十日 服三十日
- 母方ニハ服忌無之 但遠慮一日
- 一 伯叔父母 忌二十日 服九十日

母方

忌十日

服三十日

父母種替リノ兄弟姉妹ハ半減ノ服忌可受之

一 兄弟姉妹 忌二十日 服九十日

別服タリトイフトモ服忌ニ無差別

一 異父兄弟姉妹 忌十日 服三十日

一 嫡孫 忌十日 服三十日

嫡孫承祖タル時ハ嫡子ノ服忌可受父祖父母死去ノ時モ嫡孫ノ方ヘモ五十日十三月ノ服忌可受之此外ノ親類服忌差別ナシ曾孫玄孫タリトイフモ同例也

一 末孫 忌三日 服七日

女子ハ最初ニ生レテモ末孫ニ准ス娘方ノ孫服忌同前

一 曾孫玄孫 忌三日 服七日

娘方ニハ曾孫玄孫共ニ服忌無之

一從父兄弟姉妹 忌 三日 服 七日

父ノ姉妹ノ子并母方モ服忌同斷

一甥姪 忌 三日 服 七日

姉妹ノ子モ服忌同前

異父兄弟姉妹ノ子ハ半減ノ服忌可受之

一七歳未滿ノ小兒ハ無服忌

父母ハ三日遠慮其外ノ親類ハ同性ニテモ異性ニテモ一日

遠慮日數過承候得ハ追テ遠慮ニ不及

但シ八歳ヨリ定式ノ服忌可受之

附七歳未滿ノ小兒ノ方ヘモ服忌無之父母死去ノ時ハ五

十日遠慮其外ノ親類ハ一日遠慮父母ハ年月ヲ經テ承候

共聞付ル口ヨリ五十日遠慮スヘシ

一聞忌ノ事

遠國ニ於テ死去年月ヲ經テ告來ルトイフトモ父母ハ聞付

ル日ヨリ忌五十日服十三月外ノ親類ハ聞付ル日ヨリ服忌

殘ル日數可受之忌ノ日數過テ告來ラハ一日遠慮服明候共

同前

一重ル服忌ノ事

父ノ服忌イマタ不明内母ノ服忌有之ハ母ノ死去ノ日ヨリ

五十日十三月ノ服忌可受之オモキ服忌ノ内カロキ服忌ア

リテ日數終ラハ追テ不及受服忌日數アマラハ殘ル服忌ノ

口數可受之

穢ノ事 (編者略ス)

元祿六年十二月二十一日

追加

- 一 養父死去以後養母同居セストイフトモ他へ不嫁候へハ服忌可受之他へ嫁スルニ於テハ服忌無之
- 一 養父ノ妻養ハレサル以前ニ死去候得ハ嫡母ニ准シ其親類服忌無之
- 一 父ノ後妻ト通路イタシ候ハ、對面無之トモ繼母ノ服忌可受之
- 一 義絶ノ嫡子ノ服忌ハ末子ニ可准之此外ノ親類義絶トイフトモ服忌別儀ナシ
- 一 女子婚儀以前ヨリ養ハレ或ハ入贅ヲ取家督相續ノ時ハ養方ノ親類實ノ如ク相互ニ服忌可受之

- 一 婚儀未タ相調ハサル内ニテモ祝儀取カハシ候へハ夫婦相互ニ定式ノ忌ノ日數遠慮 但シ服無之
- 一 父ノ妾服忌無之
- 一 妾ハ忌服無之 但シ子出生ニ於テハ三日遠慮血荒流産有之計リニテハ妾死去ノ時遠慮無之
- 一 遺跡相續セス或ハ分地配當セサル養子養方ノ兄弟姉妹他家へ養ハル、者ニハ相互ニ服忌無之
- 一 同姓ニテモ異姓ニテモ一人へ兩様ノ續有之ハ重キ方ノ服忌可受之
- 一 名字ヲ授候計リニテハ相互ニ服忌無之本姓ノ方ノ親類定式ノ通服忌可受之
- 一 離別ノ女ハタトヒ實子有之他へ不嫁候トモ夫婦ノ縁キレ

候故相互ニ服忌無之

一子無之死去候者名跡相續ノタメ新規ニ家督相續ノ時ハ養父ノ如ク服忌可受之死去候者ノ妻ハ養母ニ可准之死去候者七歳未滿ニ候得ハ服忌無之五十日可遠慮死去候者ノ親類ハ相互ニ定式ノ服忌可受之實方ノ親類ハ父母ハ定式ノ服忌可受之祖父母伯叔父姑ハ半減ノ服忌可受之兄弟姉妹ハ相互ニ半減ノ服忌可受之此外ノ親類服忌無之

一養子願書差出之老中請取之其以後死去候ハ、家督不定内ニテモ養父母計リ五十日十三月ノ服忌可受之

一半減ノ日數三十日ハ十五口ナリ餘ハ准之

但シ七日ハ四日也三日ハ二日也

一一日ト有之ハ當夜ノ九ツ時ヨリ明ル夜ノ九ツ時迄也九ツ

前ニ候ヘハタトヒ四ツ半過ニテモ一日ノ積也

右十六ヶ條元祿六年追加ノ内也

今般聊省略而書載之

○

- 一妾服ノ子其父嫡母繼母ヲ以テ養母ニ定ムル時ハ忌五十日服十三月可受之母方ノ親類ノ服忌養實ノ差別家督相續ノ養子ノ如クナルヘシ嫡母ノ子繼母ノ服忌ニ於テモ父ノ極ノ次第右ニ同シ 但シ繼母方ノ親類ニハ服忌無之
- 一家督相續ノ養子タル者實方ノ養母嫡母繼母服忌無之分地配當セサル養子ハ右ノ服忌可受之
- 一養方ノ伯叔父姑兄弟姉妹人ニ養ハル、者ハ半減ノ服忌可受之實方ノ伯叔父姑兄弟姉妹他家ヨリ養ハル、者モ服忌

無差別

- 一 其身養子ニ参リ實方ノ伯叔父姑兄弟姊妹ノ内人ニ養ハルハトイフトモ其儘半減ノ忌服タル可シ
 - 一 父養子ニテ其子人ノ養子ニ参リ候時ハ父ノ父母兄弟姊妹養實トモニ半減ノ服忌可受之或ハ父モ養子其身モ養子ノ時ハ養父ノ實方服忌無之若シ實方ニ付テ半減ノ服忌可受續有之ハ服忌可受之
 - 一 半減ノ服忌ニ祖父母伯叔父姑兄弟姊妹ト有之ハ母方ノ祖父母伯叔父姑異父兄弟姊妹モ同斷
 - 一 嫡子ヲ人ノ養子ニ遣ハス時ハ服忌末子ノ如クタルヘシ
- 右七ヶ條更増補之

元文元年九月十五日

武家制服忌令終

右ノ如キ服忌ヲ現行スト雖モ服ハ現ニ神事ヲ憚ルニ及バザルモノナルユヘ服ハ自ラ消滅シタルノ姿ナリ

舊刑律ニテ除族トナリタルモノ新刑法ニテ公權ヲ剝奪セラレタルモノ、跡ヲ續ギタル血統ニアラザルモノハ除族ト又ハ公權ヲ剝奪セラレタルモノト相續人トハ兄弟ノ義ヲ結ビ相當ノ服忌ヲ受クルモノナルヘシ

家生ノ養父隱居シ養子ニ家督ヲ讓リタル后子佗ノ家ノ相續ヲ爲シタルトキハ養子ヨリハ養方ノ叔父ト稱シ叔父ノ服忌ヲ受クベキモノナリ

茲ニ甲家ノ戸主アリ妻ヲ娶リ男子二人ヲ擧ゲシ後ニ故アリテ妻ヲ離縁シ家督ヲ長男ニ相續セシメ其身ハ乙家ノ養子トナリ

乙家ニ於テ又ク一男ヲ舉グ其乙家ニテ舉ゲシ子ハ父ノ三男ニ當ルモノナルベシ故ニ實家ニテ舉ゲシ長男ト父トノ間ハ末子ノキモノナルベシ故ニ實家ニテ舉ゲシ長男ト父トノ間ハ末子ノ服忌ヲ用ユルナラン

戸主養子ヲ貫ヒ受ケタル后ナ戸主ノ妻死亡セシヲ以テ養子ノ姉ヲ後妻ニ迎ヘタリコノ時養子ハ戸主ノ後妻(養子ノ實姉)ヲ繼母ト稱フベキユヘ服忌モ本續ノ服忌ヲ受クベキモノナルヘシ

私生ノ子アル女戸主夫ヲ迎フルトモ其私生ノ子ハ妻ノミノ子ニシテ夫ト關係ナキモノナルユヘ別ニ契約ノアラザルヨリハ服忌ノ外ノモノタルヘシ

戸主タルモノ其妻ノ兄又ハ弟ヲ養子ニ貫ヒ受ケタルトキ妻ノ兄ナルトキハ相續人ト稱スベキモノナルユヘ戸主ノ妻ニ對シ

姉ノ服忌ヲ受クベシ妻ノ弟ナルトキハ養母ト稱スベキモノナルユヘ戸主ノ妻ニ對シ養母ノ服忌ヲ受クベキモノナルベシ

編者ハ前ニ示シタル服忌令ヲ一覽ノ便ニ供ヘンタメ表ニ製シテ左ニ示ス但シ變例解明等ハ本令ニ依テ知ルベシ

尊		屬	
高祖父母	忌十日 服三十日	曾祖父母	忌二十日 服九十日
方祖父母	忌三十日 服九十日	方父母	忌二十日 服九十日
方母	忌二十日 服九十日	伯叔父母	忌二十日 服九十日
伯叔父母	忌二十日 服九十日	兄弟姊妹	忌三日 服七日
兄弟姊妹	忌三日 服七日	兄弟姊妹	忌三日 服七日
子	忌三十日 服九十日	子	忌三十日 服九十日
嫡孫	忌三十日 服九十日	曾孫	忌三日 服七日
曾孫	忌三日 服七日	玄孫	無服
玄孫	無服	屬	卑

〔第百六十六〕明治三年正月廿九日布告

從來着服之輩忌濟之節除服出仕宣下有之候處自今前以忌服何日迄ト相届置忌濟之日ニ相當リ候得ハ勝手ニ出仕可致事

〔第百六十七〕明治六年二月十四日第五十二號達

奏任官ノ輩御用ノ都合ニ付除服出仕ノ儀ハ是迄宣下相成候處自今其管轄長官ニテ相達シ其時々可届出事

〔第百六十八〕明治六年二月二十日第六十三號布告

華族從來子細ノ所勞ト稱シ候忌服ハ自今相受ルニ不及候事

〔第百六十九〕明治五年九月十八日第二百七十六號布告

天長節拜賀自今重服者不及憚候事

〔第百七十〕明治六年二月七日第四十二號布告

除服出仕宣下候輩自今御祭典ノ節奉仕參拜不及憚候事

但忌明ノ輩同様不及憚候事

〔第百七十一〕明治五年二月廿五日第五十六號布告

自今産穢不及憚候事

〔第百七十二〕明治六年二月二十日第六十一號布告

自今混穢ノ制被廢候事

○第十五章 親屬例

○第一節 五等親圖

〔編者曰〕我邦未ダ民法ノ頒布ナキヲ以テ親屬ノ例ヲ公ニセラレタルモノナシト雖モ多少新律綱領ノ親圖ト服忌令トニヨリテ定ムルノ慣習トナリタルモノ、如シ現行法律中刑法ニ親屬例アレドモ這ハ是レ之レヲ以テ今日ノ慣習民律ニ適用スベカラズ依テ茲ニ新律綱領ヨリ拔萃シテ左ニ一表ヲ示スノミ

五等親圖

一 父母	養父母
二 兄弟姉妹	子
三 姪	孫
四 姪子	孫子
五 外孫	孫子ノ子

二 祖父母	嫡母	繼母	伯叔父姑
三 曾祖父母	伯叔ノ婦	夫ノ姪	從父兄弟姉妹
四 高祖父母	從祖祖父姑	從祖伯叔父姑	
親等	夫ノ兄弟姉妹	兄弟ノ妻	再從兄弟姉妹
等	外祖父母	舅姨前夫ノ子	兄弟ノ孫
親	從父兄弟ノ子	外甥	曾孫
等	妻ノ父母	姑ノ子	舅姨ノ子
五	外孫	女婿	玄孫

從父兄弟姉妹ハ、兄弟ノ子、相呼テ、從父ト爲ス、長者ヲ兄ト曰ヒ、少者ヲ弟ト曰フ、

從祖祖父姑ハ、祖父ノ兄弟姉妹ヲ謂フ、從祖伯叔父姑ハ、從祖祖父ノ子ヲ謂フ、即チ父ノ從父兄弟姉妹、

再從兄弟姉妹ハ、從祖伯叔父ノ子ヲ謂フ、

舅姨ハ、母ノ兄弟ヲ舅ト曰ヒ、姉妹ヲ姨ト曰フ、

〔編者解釋〕改正刑法ニハ、妾ヲ親屬例中ニ加ヘザレドモ之レ刑事上ノ關係ノミニシテ戶籍上ニ關係スベキモノニ非ズ、然ルニ明治四年四月四日布告ノ戶籍法〔第一〕ヲ參看スベシニ、妾ノ名目ナシ果ノ如何ノ處ニ列スベキヤ之レ妻ノ次ニ列スベキモノナルベシ

今茲ニ妻妾ヲ有スル人アリ、其妻死亡又ハ離縁等ヲナストキハ

妾ヲシテ直チニ後妻ニ引直スヲ能フナリ

○第二節 刑法上親屬例

第七十二 刑法第一編ノ内

第十章 親屬例

第一百四條 此刑法ニ於テ親屬ト稱スルハ左ニ記載シタル者ヲ云フ

一 祖父母父母夫妻

二 子孫及ヒ其配偶者

三 兄弟姉妹及ヒ其配偶者

四 兄弟姉妹ノ子及ヒ其配偶者

五 父母ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

六 父母ノ兄弟姉妹ノ子

七配偶者ノ祖父母父母

八配偶者ノ兄弟姉妹及ヒ其配偶者

九配偶者ノ兄弟姉妹ノ子

十配偶者ノ父母ノ兄弟姉妹

第一百五條

祖父母ト稱スルハ高曾祖父母外祖父母同シ父母ト稱スルハ繼父母嫡母同シ子孫ト稱スルハ庶子曾玄孫外孫同シ兄弟姉妹ト稱スルハ異父異母ノ兄弟姉妹同シ

養子其養家ニ於ル親屬ノ例ハ實子ニ同シ

第七十三 治罪法第一編ノ内

第三十條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第一百四條第一百五條ノ例ニ從フ

第七十四 刑法第三編第一章ノ内

第十三節 祖父母父母ニ對スル罪

第三百六十二條 子孫其祖父母父母ヲ謀殺故殺シタル者ハ死刑ニ處ス

其自殺ニ關スル罪ハ凡人ノ刑ニ照シテ二等ヲ加フ

第三百六十三條 子孫其祖父母父母ニ對シ毆打創傷ノ罪其他監禁脅

迫遺棄誣告誹毀ノ罪ヲ犯シタル者ハ各本條ニ記載シタル凡人ノ刑ニ照シ二等ヲ加フ但癡疾ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處シ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處ス

第三百六十四條 子孫其祖父母父母ニ對シ衣食ヲ供給セス其他必要ナル奉養ヲ缺キタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
因テ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第三百六十五條 祖父母父母ニ對シタル殺傷ノ罪ハ特別ノ宥恕及ヒ
不論罪ノ例ヲ用フルヲ得ス但其犯ス時知ラサル者ハ此限ニ在ラ
ス

【第三百七十五】刑法第三編第一章第十一節ノ内

第三百五十三條 有夫ノ婦姦通シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁
錮ニ處ス其相姦スル者亦同シ

此條ノ罪ハ本夫ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シ
タル者ハ告訴ノ效ナシ

【第三百七十六】刑法第三編第一章第三節ノ内

第三百一十一條 本夫其妻ノ姦通ヲ覺知シ姦所ニ於テ直チニ姦夫又ハ
姦婦ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ス但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル
者ハ此限ニ在ラス

(第三百七十七)ヲ
參看スベシ

【第三百七十七】刑法第三編第二章第一節ノ内

第三百七十七條 祖父母父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟
姉妹互ニ其財物ヲ竊取シタル者ハ竊盜ヲ以テ論スルノ限ニ在ラス
若シ佗人共ニ犯シテ財物ヲ分ナタル者ハ竊盜ヲ以テ論ス

【第三百七十八】刑法第三編第二章第三節遺失物埋藏物ニ關スル罪ノ内

第三百八十七條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條
ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

【第三百七十九】刑法第三編第二章第五節詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關
スル罪ノ内

第三百九十八條 此節ニ記載シタル罪ヲ犯シタル者第三百七十七條
ニ掲ケタル親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

【第三百八十一】刑法第三編第一章第七節脅迫ノ罪ノ内

第三百二十八條 親屬ニ害ヲ加フ可キ事ヲ以テ脅迫シタル者ハ亦前二條ノ例ニ同シ

第三百二十九條 此節ニ記載シタル罪ハ脅迫ヲ受ケタル者又ハ其親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三百八十一條 刑法第二編第三章第三節囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪ノ内

第三百五十三條 前二條ノ罪ヲ犯シタル者犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セス

〔編者曰〕 前二條トハ即チ犯罪人逃走ノ囚徒監視ニ付セラレタル者ト知テ藏匿シ又ハ隱避セシムルノ刑ト他人ノ罪ヲ免レシメントシテ罪証トナルベキ物件ヲ隱蔽シタル者ノ刑トチ定メラレタル即チ第三百五十一條第三百五十二條ノ法文ヲ指シ

タルモノナリ

第十六章 財産相續ニ關スル雜則

○第一節 不動産

【第百八十二】明治十三年十二月三十日第五十二號布告ノ内

土地賣買讓渡規則

第五條 死亡者失踪者ノ家督相續若シハ遺産相續及ヒ離縁戸主ノ家督相續ニ依リ土地ヲ讓受ケタル者ハ親族(親族ナキ者ハ近隣ノ戸主ト連印ノ上戸長役場ヲ經テ地券書換裏書願書ヲ管轄廳ヘ差出スヘシ若シ家督相續又ハ遺産相續ノ日ヨリ六ヶ月以内ニテ戸長役場迄之ヲ差出サ、ル者ハ証印稅五倍ノ科料ニ處ス

但シ本條期限内ニ地券書換裏書願書ヲ差出ス能ハザル事由アリテ之ヲ届出ル者ハ此限ニアラス

【第百八十三】明治八年九月三十日第百四十八號布告

建物賣買讓渡規則

第四條 書入質ト成リタル建物ヲ(買受讓受)タル者ハ其建物ノ書入質ト爲リタル金數ノ償却ヲ引受クヘシ但(買受讓受)人ニ於テ其建物所有ノ權ヲ拋棄スルトキハ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受クルニ及ハス

第五條 第四條ノ場合ニ於テ戸主ノ後ヲ受ケタル相續人ハ前戸主ヨリ讓受ケタル建物所有ノ權ヲ拋棄スト雖モ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受クヘシ

【第百八十四】明治十四年五月廿五日第三十三號布告ノ内

左ニ掲クルモノハ券面代價ノ有無ニ拘ハラズ券狀一通ニ付三錢トス

代換授與並ニ水火盜難ニヨリ地券書換

○第二節 動産

〔第百八十五〕明治八年九月三日第百三十五號布告ノ内

出版條例

第十二條 著譯者死後ニ至リ其相續人遺稿ヲ出版スルコトヲ得其版權ヲ願フキハ之ヲ與フ可シ

第十三條 版權年限未タ終ラサルノ間ハ板主ノ相續人ニ傳フ可シ

但シ版權讓受ノ由ヲ相續人ヨリ内務省ヘ届ケ出ツ可シ

第二十一條 出版ノ圖書ニハ著譯者ノ住所氏名ヲ記ス著譯者ノ氏名ヲ知ルヘカラサル者ハ其由ヲ記ス可シ而シテ何年月日出版或ハ何年月日版權免許ト記シ板主ノ住所氏名ヲ記スヘシ氏名ヲ記セスシテ別號ヲ記スルヲ得ス

板權ヲ相續シ若クハ賣買若クハ分板シタルキハ相續人買主及ヒ分板ヲ受ケタル者ノ住所氏名ニ改ムヘシ

第二十四條 板權ヲ相續シ若クハ賣買シ若クハ分板シ及ヒ改板シテ届ケ出サル者ハ其板權ヲ失フヘシ

〔第百八十六〕明治九年六月十七日第九十號布告ノ内

寫真條例

第四條 出版條例第七條第十三條第二十一條ノ第二項第二十二條第二十三條第二十四條及ヒ第二十六條ハ寫真板權ニ適用ス可シ

〔第百八十七〕明治十年十二月二十八日第八十九號布告ノ内

賣藥規則

第十四條 賣藥營業者及ヒ請賣者免許期限中共相續人ニ於テ之ヲ相續スル時ハ其由ヲ記シ管轄廳ヘ鑑札名前書換ヲ請フヘシ

〔第八十八〕明治十三年九月二十七日第四十號布告ノ内

酒造稅則

第七條 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシキハ其旨管廳ニ願出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

〔第八十九〕明治十三年九月廿七日第四十一號布告ノ内

醫麴營業規則

第七條 免許鑑定失却毀損スルカ或ハ代替改名轉居セシ時ハ管廳ニ願出再渡又ハ書換ヲ請フヘシ

〔第九十〕明治十五年十二月二十七日第六十三號布告ノ内

烟草稅則

第八條 鑑札ヲ失却毀損シ又ハ代替改名轉居セシトキハ之ヲ管轄廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請フ可シ但前條ノ通鑑札料ヲ納ム可シ

〔第九十一〕明治十六年四月十七日第十三號布告ノ内

船稅規則

第九條 鑑札ヲ亡失毀損シタル時或ハ改名代替ノ時或ハ船號ヲ改メ若シハ定繫場ヲ變換シタル時ハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ再渡若シハ引換ヲ乞フヘシ

〔第九十二〕明治十三年六月七日第三十號布告 改正ノ内

新舊公債證書發行條例

第六節 (新舊公債證書授受賣買等ノ手續ヲ明ニス)

第一節 新舊公債證書共全ク所持人ノ所有物ナレハ他人(外國人ヲ除ク)へ讓渡賣渡質入等都テ勝手タルヘシ尤モ死者又ハ失踪者遺囑ノ公債證書並ニ養子ノ戶主離縁復籍スルキ其養家ニ屬スル公債證書ハ特約アルモノ、外総テ其遺留財産ヲ相續スベキモノ、所有ニ皈スルモノトス

但本文讓渡賣渡ハ第二節以下ノ手續ニ照準スベク又死亡失踪離縁ニヨリ遺留セル證書ハ此條例附錄第二圖ノ振合ニ依テ名面書替ノ上管廳ノ檢印ヲ受クヘシ

〔編者曰〕 家祿引換公債證書金祿公債證書金札引換公債證書起業公債證書仲仙道鐵道公債證書等モ概テ本則ニ依リ大同小異アルノミ
右ノ外動産相續ニ付テハ種々アルベケントモ只タ主タルモノヲノミ示シテ餘ハ略ス

○第三節 雜

〔第九十三〕 明治十七年五月一日第十一號布告ノ内
證券印稅規則

第二條 (略ス)

第一類

〔零ス〕

- 一 遺金証文 印稅 壹錢
- 一 跡式讓証文 同 壹錢

〔第九十四〕 明治十七年四月二十二日第九號布達

印紙類賣捌規程

第一條 印紙類ノ賣捌ハ陸軍恩給令巡查看守給助例ニ依テ傷痍ノ爲メ終身恩給ヲ受クル者及ヒ陸軍恩給令第二十一條第一項海軍恩給令第二十二條第一項巡查看守給助例第二條第三項ニ掲クル寡婦(孤兒)ニシテ扶助料ヲ受クル者ニ限リ之ヲ許可スヘシ

第二條 府知事縣令ハ適宜每郡區内ニ印紙類賣捌人員ヲ定メ之ヲ大

藏省ニ届出ヘシ

第三條 第一條ノ資格ヲ有スル出願者第二條ノ定員ニ滿タサル時ハ一般陸軍恩給令海軍恩給令巡查看守給助例ニ依リ恩典ヲ受クル者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

但本條ヲ以テスルモ猶定員ニ充タサル地方ニ於テハ二ケ年以内ノ期限ヲ定メ一般人民ニ許可スルコトヲ得

第十條 賣捌人ニシテ左ノ事項ニ該ル者ハ賣捌殘餘ノ印紙類及ヒ賣捌所看板ヲ返納スヘシ此場合ニ於テハ返納印紙代金ニ對スル當初下渡ノ手数料ヲ除去シ其殘金額ヲ返付スヘシ

- 一 恩給ヲ受タル權消絶シタル時
- 一 恩給停止ノ時
- 一 廢業シタル時

一 此規程ニ背キ營業禁止又ハ停止セラレタル時

〔第九十五〕明治六年五月三十一日第百八十四號布告

婦女子ニテ一家相續致候者ハ公私トモ他日証據ト爲スヘキ者ハ自印相用可申事

〔第九十六〕刑法附則第五章ノ内

第六十二條 贓物ノ還給損害ノ賠償ハ本犯死スル時ハ其相續人ニ對シ之ヲ要求スルヲ得

第六十三條 贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ケタル者還給賠償セサル時ハ被害者ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ處分ヲ請求スルヲ得

〔編者曰〕生存中ノ贈遺遺物ノ相續ニ付テハ我國民法ノ制定ナシト雖モ亦タ法律ノナキニ非ズ然レドモ今之レチ一々載ス

ルトキハ實ニ冗ニ過ギ戸籍法編纂ノ趣旨ニ戾ルベキヲ恐レ
今茲ニ畧ス佗日子ガ編纂スル所ノ戸長職務ニ關スルノ全書
ト併セラテ參照熟閱セラレヨ

令訓現行戸籍全書 第一編 畢

檢査徵集類纂

○第一章

徵兵區及
事務官

〔改徵〕第二十四

條 徵兵區ハ軍
管師管及ヒ府
縣ノ區域ニ從
フ其軍管ニ從
フモノヲ軍管
徵兵區ト爲シ
管師ニ從フモ

令訓現行戸籍全書

西備戸田十畝 編纂

○第二編 徵兵關係戸籍

○第一章 兵籍總則

〔改徵〕第一條 全國ノ男子年齢滿十七歳ヨリ滿四十歳

迄ノ者ハ總テ兵役ニ服ス可キモノトス

第二條 兵役ハ陸軍海軍共ニ常備兵役後備兵役及ヒ國

民兵役トス

第六條 各兵役ノ期限已ニ滿ツルト雖モ戰時或ハ事變

ニ際スルキ若シハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ舉アルトキ

若シハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延ハスコトア

ノテ師管徴兵
ル可シ

區ト爲シ府縣

ニ從フモノヲ

府縣徴兵區ト

爲ス

但シ府縣ノ

管地兩師管

ニ分屬スル

モノハ師管

毎ニ一區ヲ

設ク軍管及

ヒ師管ノ徴

○第一節 國民兵

改徴 第五條 國民兵役ハ年齡滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ者ニシテ常備兵役及ヒ後備兵役中ニ在ラザル者之ニ服ス

第十五條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限り之ヲ召集シ隊伍ニ編制シテ軍役ニ充ツ

○第二節 常備兵

改徴 第三條 常備兵役ハ別ヲテ現役及ヒ豫備役トス

兵區域ハ別

表ニ掲ク

第二十五條 各

鎮臺ニ屬スル

歩兵ハ其師管

徴兵區限リ其

他ノ諸兵ハ其

軍管徴兵區限

リ之ヲ徴集ス

但シ現役徴

員及ヒ其補

充員不足ス

其現役ハ三個年ニシテ年齡滿二十歳ニ至リタル者之ニ服シ其豫備役ハ四個年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

○第一款 現役兵

改徴 第八條 陸軍現役兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ壯丁ノ身材藝能職業ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ海軍現役兵ハ海軍所要ノ人員ニ應シ沿海地方及ヒ島嶼ノ人民ヲ調査シ海軍ニ適スル職業ニ從ヒ水兵火夫職工等ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

但シ海軍志願兵徵募規則ニ依リ就役スル者ハ本令

ル片歩兵ハ

他ノ師管共

他ノ諸兵ハ

他ノ軍管徵

兵區ヨリ之

ヲ補フ

海軍及ヒ近衛

ノ諸兵ハ各軍

管徵兵區ニ配

當シテ全國ヨ

リ之ヲ徵集ス

〔務條〕第一條

ノ限ニ在ラス

第九條 陸軍雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮

スルコトアル可シ

但シ常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第三十八條 現役兵在營在艦中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ服

食等ヲ給ス

〔務條〕第七十四條 現役兵ニ編入ノ順序左ノ如シ

一 徵兵令第四十一條ニ當ル者ハ年齢ノ順序又同年齡ノ者

ニ 徵兵令第四十條ニ當ル者ハ第一項ノ者ニ亞キ年齢ノ順序又同

三 徵兵令第十條ニ當ル者ハ第二項ノ者ニ亞キ年齢ノ順序又同

四 現役當籤ノ者ハ第三項ノ者ニ亞キ當籤番號ノ順序ニ從フ

五 補充當籤ノ者ハ歩兵ニ在テハ師管徵兵區内其他ハ軍管徵兵區内ニ平均シ當籤番號ノ順序ニ從フ

徵兵事務官ハ 第七十七條 新兵ハ概テ毎年四月二十日ヨリ五月二十

左ノ如シ 日迄ニ入營セシム可シ

一 鎮臺後備 第七十八條 新兵入營ノ日時及ヒ場所ハ毎年近衛局鎮

軍司令官 臺又ハ鎮守府ヨリ府縣廳ニ通牒シ府縣廳ハ速ニ其旨

二 營所後備 ヲ入營ス可キ者ニ達セシメ左ノ手續ヲ爲ス可シ

軍司令官 一 鎮臺兵ハ其員數及ヒ入營地ニ應シ最寄テ分テ所

三 府縣駐在 要ノ附添人ヲ附シ入營地ノ後備軍司令部ニ出頭

官 セシム可シ

四 郡區駐在 二 近衛兵及ヒ海軍兵ハ一府縣ニ一人若クハ二人ノ

官 附添人ヲ附シ近衛局或ハ鎮守府ニ出頭セシム可

五 醫官 シ

六 府知事縣 第七十九條 新兵入營地迄ノ旅費並ニ附添人ノ旅費ハ

令

七 府縣兵事
課長
八 郡區長

定則ニ照準シ大藏省ヨリ支給ス可シ
第一百四十三條 徵兵検査呼出又ハ入營ニ際スルトキハ
民事詞訟ノ爲メ裁判所ノ召喚アリト雖モ検査又ハ入
營日時ヲ延期セス

第二條 鎮臺後

〔陸務〕第二十三項 徵兵事務條例第七十八條ニ掲クル

備軍司令官ハ
其軍管内徵兵
ノ事ヲ掌ル

附添人ノ割合ハ概テ新兵五人以上三十人未滿ノ一群
ニハ附添人一名三十人以上ノ一群ニハ三十人毎ニ二
名ノ附添人タルヘシ

第三條 營所後

但四名以下ハ附添人ヲ要セス各自單行セシムベシ

備軍司令官ハ
其師管内徵兵
ノ事ヲ掌リ又

○第二款 豫備兵

〔改徵〕第十三條 豫備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ

每年新兵徵集
ノ際府縣徵兵
署ヲ巡行シ兵
種ノ撰定簿冊
ノ審査兵役免
除ノ處分ヲ爲
シ徵集猶豫ニ
係ル者ハ府知
事縣令ト商議
シ之ヲ裁決ス
但鎮臺所在地
ニハ營所後備

召集シ常備隊ヲ充實シ又補充隊ニ編制ス平常ニ在テ
ハ技藝復習ノ爲メ毎年一度六十日以内之ヲ召集ス又
兵員實查ノ爲メ毎年一度點呼ヲ爲ス
但シ海軍豫備兵ハ技藝復習ノ爲メ召集スルコトナ
シ
〔達〕明治十七年三月四日陸軍省甲第十五號達ノ内
昨十六年十二月第四十六號布告ヲ以テ徵兵令御改正相
成候付テハ目下豫備兵及後備兵服役ノ者ハ同令第三條
及第四條ニ據リ左之通可相心得此旨相達候事
一 目下豫備兵服役中ノ者ハ最初豫備軍へ編入セシ年
ノ四月廿日ヨリ起算シ四ケ年ノ役ニ服セシメ滿期ノ
後後備兵役ニ服セシム

軍司令官ヲ置
カサルヲ以テ
鎮臺後備軍司
令官其職掌ヲ
兼攝スルモノ
トス

但定期ニ非スシテ臨時豫備軍へ編入セシ者ハ其編
入セシ日ヨリ起算シ四ケ年ノ役ニ服セシメ滿期ノ
後後備兵役ニ服セシム

○第三節 後備兵

第四條 府縣駐
在官ハ其府縣
内徴兵ノ事ヲ
掌リ又毎年新
兵徴集ノ際醫
官及ヒ府縣兵

〔改徴〕 第四條 後備兵役ハ五箇年ニシテ常備兵役ヲ終
リタル者之ニ服ス

第十四條 後備兵ハ戰時若シハ事變ニ際シ豫備兵ニ次
イテ之ヲ召集シ常備兵ノ後援ト爲ス平常ニ在テ其技
藝復習ノ爲メニ召集シ及ヒ兵員實查ノ爲メニ點呼ヲ
爲ス豫備兵ニ同シ

〔達〕 明治十七年三月四日陸軍省甲第十五号達ノ内

事課長ト共ニ
徴兵検査所ヲ
巡行シ壯丁檢
査ノ事ヲ掌ル

第五條 郡區駐
在官ハ其郡區
内徴兵ノ事ヲ
掌リ又毎年新

一目下後備兵服役中ノ者ハ最初後備軍へ編入セシ年ノ
四月廿日ヨリ起算シ五ケ年ノ役ニ服セシメ滿期ノ後
國民兵役ニ服セシム
但定期ニ非スシテ臨時後備軍へ編入セシ者ハ其編
入セシ日ヨリ起算シ五ケ年ノ役ニ服セシメ滿期ノ
後國民兵役ニ服セシム

○第四節 補充員

兵徴集ノ際名
簿調査ノ事ヲ
掌ル

第六條 醫官ハ

〔改徴〕 第三十條 補充員ハ補充籤ヲ抽キタル者ヲ以テ
一個年間之ニ充ツ其期限内現役兵欠員ナルト又ハ戰
時若シハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルト其番號ノ順序ニ
從ヒ之ヲ徴集ス

毎年新兵徵集ノ際一等軍醫以下軍醫試補以上ヲ以テ之ニ充ツ

一等軍醫ハ後備軍司令官ニ從ヒ府縣徵兵署ヲ巡行シ壯丁ノ身材骨格兵役ニ適スルヤ否ヲ検査ス

補充員ノ數ハ概テ現役徵員五分ノ二ヨリ少ナカラザルモノトス

務條 第七十五條 歩兵ノ補充員不足シ師管徵兵區内ニ於テ現役兵ヲ充實スル能ハサルトキハ營所後備軍司令官ハ鎮臺後備軍司令官ヲ經テ鎮臺司令官ニ上申シ鎮臺司令官ハ他ノ師管ヨリ之ヲ充實シ又他兵ノ補充員不足シ軍管内ニ於テ現役兵ヲ充實スル能ハサルトキハ鎮臺司令官ヨリ之ヲ陸軍省ニ開申ス可シ

第九十條 補充員ハ臨時補缺ヲ除クノ外鎮臺ニ於テ毎年九月一日ノ現役兵缺員ニ應シ概テ十月二十日ヨリ同月三十一日迄ニ入營スルモノトス但近衛兵海軍兵ニ在テハ近衛局海軍省ヨリ所要ノ人員ヲ九月二十日

ルコトヲ掌ル

二等軍醫以下軍醫試補以上ハ府縣駐在官ト共ニ徵兵検査所ヲ巡行ス其職掌一等軍醫ニ同シ

第七條 毎年新兵徵集ノ際前諸條官員ノ外海軍將校ヲシ

迄ニ陸軍省ニ通牒シ陸軍省ハ之ヲ各軍管ニ賦課ス可シ

第九十一條 補充員入營ノ期ニ臨ミ疾病又ハ犯罪等ニテ入營スル能ハサル者ハ其事實ヲ詳記シ本人所持ノ番號割符ヲ添ヘ(疾病ハ醫師ノ診斷書第五ヲ添ヘ速ニ戶長ニ届出可シ戶長ハ奥書証印シ郡區長ヲ經テ府縣廳ニ差出ス可シ該廳ニ於テハ其次番號ノ者ヨリ順次ニ繰上ケ徵集人員ヲ充實シ入營セシメ其旨ヲ府縣駐在官ニ通牒ス可シ

第九十二條 前條ノ事故ニ據リ入營セサル者ハ翌年徵集ノ期ニ當リ郡區長ニ於テ其名簿ヲ作り府縣廳ニ差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ

テ後備軍司令
官ノ事務ニ參
セシムルコト
アル可シ

第八條 府知事

縣令ハ管内徵

兵ノ事ヲ掌リ

又毎年新兵徵

集ノ際府縣徵

兵器ニ於テ後

備軍司令官ト

商議シ徵集猶

第九十三條 補充員ニシテ入營ヲ命セラレタル者其入營

迄ノ扱ハ總テ現役當籤者入營前ノ扱ト異ナルヲナシ

第九十八條 補充員ニシテ第八十五條但書ニ當ル事故

ヲ生シ徵集猶豫ヲ出願スル者ハ第八十六條ノ手續ニ

據リ主務省ニ開申ス可シ但主務省ニ於テハ詮議ノ上

第一豫備徵員ニ編入ス可シ

〔編者曰〕 第八十五條ハ第一章第五節第八節ニ

第八十六條ハ第一章第八節ニ載ス共ニ就テ知

ルベシ

○第五節 第一豫備徵員

〔改徵〕 第三十一條 補充員ニシテ其期限内徵集ノ命ヲ

豫ノ裁決ヲ掌ル

第九條 府縣兵

事課長ハ其府

縣内徵兵ノ事

務ヲ整理シ又

毎年新兵徵集

ノ際府縣駐在

官ト共ニ徵兵

檢査所ヲ巡行

シ檢査ノ事務

ヲ補助ス

第十條 郡區長

キ者及ヒ第十八條第三項ノ生徒ニシテ二箇年以上ノ

課程ヲ卒リタル者ハ年齢滿二十七歳迄之ヲ第一豫備

徵員トス

〔編者曰〕 第十八條第三項ハ第七章第一節ニ載

ス就テ知ルベシ

第三十三條 豫備徵員ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ

要スルトキ之ヲ徵集ス

但シ第二豫備徵員ヲ徵集スルハ後備兵ヲ召集スル

トキニ限ル

〔務條〕 第八十五條 徵兵令第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶

豫スルハ抽籤以前該條項ニ當ル者ニ限ル但戶主若ク

ハ父兄等死没シ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレ或ハ痲疾不

ハ郡区内徴兵ノ事ヲ掌リ又毎年新兵徴集ノ際名簿調製ノ事ヲ掌ル

具等トナリ本人ヲ要スルニアラサレハ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルトキハ詮議ノ上郷里ニ歸休セシメ又ハ第一豫備徴員ニ編入ス
抽籤後養子又ハ他家ノ相續人トナリ前項ノ事故ヲ生スルモ詮議ニ及ハス

第十一條 毎年

新兵徴集ノ際

〔編者曰〕第十七條ハ第四章第五章第三章ニ載ス就テ知ルヘシ

師管徴兵區ノ

第八十七條 前條ノ者生兵或ハ二等若水兵若クハ二等

諸記録ハ後備

若火夫ノ卒業後ナレハ郷里ニ歸休セシメ又卒業以前

軍司令部書記

ナレハ之ヲ第一豫備徴員ニ編入ス

ナシテ之ヲ掌

〔編者曰〕前條ハ第一章第八節ニ載ス就テ知ル

ラシム

ベシ

検査及ヒ抽籤

第八十八條 近衛兵ニシテ前條ニ據リ歸休セシメ又ハ

ノ筆記ハ筆生

第一豫備徴員ニ編入スル者ハ近衛局ヨリ本籍所管ノ

ヲシテ之ヲ掌

鎮臺ニ通牒シ該鎮臺ノ管理ニ属ス可シ

ラシメ身体檢

第九十八條 補充員ニシテ第八十五條但書ニ當ル事故

查ノ記録ハ地

ヲ生シ徴集猶豫ヲ出願スル者ハ第八十六條ノ手續ニ

方 醫員ヲ之

據リ主務省ニ開申ス可シ但主務省ニ於テハ詮議ノ上

ヲ掌ラシメ又

第一豫備徴員ニ編入ス可シ

身体検査ノ補

〔編者曰〕第八十五條ハ本節并ニ第八節ニ第八

助ヲ爲サシム

十六條ハ第一章第八節ニ載ス共ニ就テ知ル

ルコアルヘシ

ヲ得ヘシ

醫員筆生ハ府

第一百三十二條 徴兵令第十八條第三項ノ生徒ニシテ二

知事縣令ノ撰

個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ノ同令第三十一條ニ據

ヲ以テ命スル
モノトス

第十二條 徵兵

猶豫ノ事ニ係

リ後備軍司令

官ト府知事縣

令ト商議整ハ

カルトキハ各

其事由ヲ具シ

陸軍卿ニ伺出

可シ但後備軍

司令官ハ其所

リ第一豫備徵員ニ編入ス可キヲ以テ徵兵検査時限ニ
至レハ郡區長ヨリ其學校ニ通牒シ最寄ノ徵兵検査所
ニ出頭セシメ身體ノ検査ヲ受ケシム可シ

〔編者曰〕

徵兵令第十八條第三項ハ第七章第一
節ニ同令第三十一條ハ本節ニ載ス共ニ就テ知
ルコトヲ得ベシ

○第六節 第二豫備徵員

〔改徵〕

第三十二條 第十七條ニ當ル者ニシテ其年徵集

ノ命ナキ者第十八條第二十一條ニ當ル者ニシテ七個
年間其事故ノ存スル者及ヒ第一豫備徵員ヲ終リタル
者年齢滿三十二歳迄ハ之ヲ第二豫備徵員トス

管長官ヲ經由

ス可シ

第三十二條 每

年徵集ス可キ

陸軍新兵ノ員

數ハ陸軍卿之

ヲ告示シ海軍

新兵ノ員數ハ

海軍卿之ヲ告

示ス可シ

第三十三條 鎮

臺司令官ハ其

但シ第十七條ニ當ル者第二豫備徵員ト爲リタル後
六個年間ニ該條ニ掲クル資格ヲ失ヒタルトキハ現
役ニ徵集ス

〔編者曰〕

第十七條ハ第四章第五章第三章ニ第
十八條ハ第七章第八章第十章ニ分載ス就テ知
ルコトヲ得ベシ

第三十三條 豫備徵員ハ戰時若シハ事變ニ際シ兵員ヲ
要スルトキ之ヲ徵集ス

但シ第二豫備徵員ヲ徵集スルハ後備兵ヲ召集スル
トキニ限ル

〔務條〕

第一百一條 徵兵令第三十二條ニ據リ第二豫備徵
員トナル者ハ其年四月二十日ニ至レハ別ニ命ナクシ

告示ニ基キ後
 備軍司令官ヨ
 リ差出ス所ノ
 人員ヲ率トシ
 軍管徵集人員
 配當表第十
 書式ヲ
 作り之ヲ陸軍
 省ニ開申シ又
 管内府縣廳及
 ヒ府縣駐在官
 ニ通牒ス可シ
 府縣廳ニ於テ

テ第二豫備徵員ニ編入セラレタル者ト心得可シ
 第二豫備徵員年齢三十三歳トナル年ノ四月二十日ニ
 至レハ別ニ命ナクシテ國民兵役ニ編入セラレタル者
 ト心得可シ

〔編者曰〕徵兵令第三十二條ハ本節ニ載ス就テ
 知ル可シ

〔達〕明治十七年五月廿二日陸海軍省甲第二十三號達
 徵兵ニ相當スル者賭博犯ニ依リ懲罰ヲ受ケ右處分中ハ
 徵集ヲ猶豫シ又其處分中常備年期ヲ經過スル者ハ年齢
 滿三十二歳迄第二豫備徵員トスヘキ儀ト可心得此旨相
 達候事

ハ之ヲ管内ニ

告示ス可シ

第四百十三條

徵兵検査呼出

又ハ入營ニ際

スルトキハ民

事訴訟ノ爲メ

裁判所ノ召喚

アリト雖モ檢

査又ハ入營日

時ヲ延期セス

〔陸務〕第一項

○第七節 志願兵

○第一款 一年志願兵

〔改徵〕第十一條 年齢滿十七歳以上滿二十七歳以下ニ

シテ官立府縣立學校(小學校ヲ除ク)ノ卒業証書ヲ所持

シ服役中食料被服等ノ費用ヲ自辨スル者ハ願ニ因リ

一個年間陸軍現役ニ服セシム

其技藝ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ歸休ヲ命スルコ

トアル可シ

但シ常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

〔務條〕第一百三條 徵兵令第十一條ニ據リ一個年間現役

ニ服セシムコトヲ志願スル者ハ毎年九月一日ヨリ同月

十五日迄ニ其願書第二
三書式ヲ戸長ニ差出ス可シ戸長ハ

近衛局及ヒ鎮
 臺ハ十一月一
 日ノ現員ニ依
 リ翌年ノ所要
 徵員表ヲ製シ
 十一月十五日
 迄ニ之ヲ陸軍
 省ニ開申スベシ

之ニ與書証印シ郡區長ヲ經テ十月一日限リ府縣廳ニ
 差出シ府縣廳ヨリ之ヲ徵兵署ニ送ル可シ
 第一百四條 志願者ハ當分ノ内各自ノ志望ニ由リ歩兵看
 護卒及ヒ看馬卒ノ内ニ就キ其種類ヲ撰ヒ出願スルコ
 トヲ得
 第一百五條 食料被服等ノ自辨金ハ一名金一百圓ニシテ
 其現品ハ官ユリ之ヲ支給ス但自辨金ハ二月一日迄ニ
 府縣廳ヲ經テ鎮臺ニ納ム可シ
 徵兵令第十一條第二項ニ據リ若干月ヨシテ歸休ヲ命
 シタル者ニハ殘金ヲ返付ス可シ
 第一百六條 志願兵入營前ノ扱ハ總テ現役當籤者ト異ナ
 ルコトナシ

第二項 徵集人

員ノ配當ハ歩
 兵ニ在テハ一
 師管區内ノ壯

丁名簿及ヒ壯
 丁異動名簿ノ
 徵集ノ部ニ記
 載シタル總人
 員ヲ率トシ他
 ノ諸兵及ヒ雜
 卒職工ハ一軍
 管徵兵區内ノ
 壯丁名簿及ヒ
 壯丁異動名簿
 ノ徵集ノ部ニ
 記載シタル總

入營後第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生ゼシトキハ第
 八十六條及ヒ第八十七條ヲ適用ス可シ
 [編者曰] 第八十五條ハ第一章第五節ニ第八十
 六條第八十七條ハ第一章第八節ニ載ス共ニ就
 テ知ルヲ得ベシ
 第一百七條 歩兵志願者ハ各軍管ニ之ヲ經メ別段ノ教育
 ヲ受ケシメ看護卒看馬卒志願者ハ各軍管ノ其部ニ屬
 シ教育ヲ受ケシム可シ
 第一百八條 志願兵現役一個年ヲ終レハ六個年間豫備役
 ニ服ス可シ
 第一百九條 志願兵中品行方正勤務勉勵ニシテ技藝ニ熟
 達シ下士ノ任ニ堪フ可キ者ニハ其適任証書ヲ付與ス

人員ヲ率トシ
 之ヲ府縣徵兵
 區内ノ壯丁名
 簿及ヒ壯丁異
 動名簿ノ徵集
 ノ部ニ記載シ
 タル人員ニ配
 當シテ徵兵事
 務條例第三十
 三條ノ配當表
 ナ作ルヘシ
 但近衛諸兵

可シ
 又教育上拔群ノ結果ヲ得タル者ハ豫備役下士ニ任シ
 士官適任証書ヲ付與ス可シ

〔陸務〕第二十一項 一年志願兵合格ノ者ハ抽籤ノ法ヲ
 用ヒス年齡ノ順序又同年齡ノ者ハ誕生日日ノ順序ニ
 從ヒ別ニ府縣及ヒ種類毎ニ一貫ノ番號ヲ附スヘシ

○第二款 一般志願兵

〔改徵〕第十條 年齡二十歳ニ滿タスト雖モ滿十七歳以
 上ノ者ハ現役ヲ志願スルコトヲ得

〔務條〕第九十五條 補充員ニシテ現役ヲ志願スル者ハ
 本人ノ願書ニ親族連署シ戶長郡區長ノ與書証印ヲ受

ハ一軍管徵
 兵區内ノ壯
 丁名簿及ヒ
 壯丁異動名
 簿ノ徵集ノ
 部ニ記載シ
 タル人員ヲ
 率トシ府縣
 ニ配當スヘシ
 第三項 毎年新
 兵徵集ノ季節
 ニ至レハ鎮臺

ケ郡區駐在官ニ願出ルトキハ詮議ノ上當籤番號ノ順
 序ニ拘ハラス補充員徵集同時之ヲ入營セシム可シ
 第二百一十一條 徵兵令第十條ニ據リ現役志願ノ者ハ其
 願書 第二十二條ニ據リ戶長郡區長ノ與書証印ヲ受ケ徵兵檢査
 所ニ出願ス可シ但檢査所ニ往復ノ旅費ハ合格者ニ限
 リ官給ス

第二百二十二條 徵兵令第十七條第十八條第一項乃至第
 三項及ヒ第十九條ニ當ル者年齡滿二十七歳以下ニシ
 テ現役ヲ志願スルトキハ前條ノ手續ヲ以テ徵兵檢査
 所ニ出願ス可シ但旅費ハ前條ニ同シ

〔編者曰〕 徵兵令第十七條ハ第四章第五章第三
 章ニ第十八條第一項乃至第三項ハ第八章第七

司令官ハ後備
軍司令官府縣

駐在官郡區駐

在官軍醫其他

後備軍司令部

書記等ニ巡廻

ヲ命スヘシ

第四項 一等軍

醫ノ人員ハ一

師管徵兵區ニ

一人トシ二等

軍醫以下軍醫

章ニ第十九條ハ第七章ニ分載ス就テ知ルコト
得可シ

陸務

第十九項

徵集相當ニシテ合格ノ者抽籤以前現
役ヲ志望スルルキハ徵兵署ニ於テ身幹職業ニ從ヒ現役
編入順序ニ據テ許可ス可シ

第二十項

徵兵事務條例第二百二十二條ニ當ル志願者ハ
徵兵令第十條ニ當ル者ノ次ニ列シ又前條ノ志願者ハ
尙ホ其次ニ列シ之ヲ現役ニ編入スヘシ

○第八節 歸休及歸省

改徵

第十一條

年齡滿十七歲以上滿二十七歲以下ニ
シテ官立府縣立學校(小學校ヲ除ク)ノ卒業證書ヲ所持

試補以上ノ人

員ハ一府縣徵

兵區ニ一人乃

至三人トス

第五項 後備軍

司令部書記ノ

人員ハ一師管徵

兵區ニ一人トス

第六項 地方醫

員ハ內務省醫

術開業免狀ヲ

所持スル者ニ

シ服役中食料被服等ノ費用ヲ自辨スル者ハ願ニ因リ
一個年間陸軍現役ニ服セシム

其技藝ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ歸休ヲ命スルコ
トアル可シ

但シ常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十二條

現役中殊ニ技藝ニ熟シ行狀方正ナル者及官
立公立學校(小學校ヲ除ク)ノ步兵操練科卒業證書ヲ所
持スル者ハ其期未タ終ラスト雖モ歸休ヲ命ズルコト
アル可シ

務條

第八十五條

徵兵令第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶
豫スルハ抽籤以前該項ニ當ル者ニ限ル但戶主若クハ
父兄等死没シ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレ或ハ癡疾不具

シテ其人員ハ
 概テ一府縣徵
 兵區ニ四人乃
 至六人トス又
 筆生ノ人員ハ
 徵兵署ニ五人
 乃至十人トシ
 検査所ニ三人
 乃至七人トス
 第十八項 後備
 軍司令官徵兵
 署巡廻日割ハ

等トナリ本人ヲ要スルニアラサレハ一家ノ生計ヲ營
 ムコト能ハサルトキハ詮議ノ上郷里ニ歸休セシメ又
 ハ第一豫備徵員ニ編入ス
 抽籤後養子又ハ他家ノ相續人トナリ前項ノ事故ヲ生
 スルモ詮議ニ及ハス
 第八十六條 前條但書ニ當ル者ハ戶主又ハ親族ノ者ヨ
 リ其事由ヲ詳記シ戶籍寫若クハ刑名宣告書寫若クハ
 醫師診斷書第五書式并ニ同郡區内現役兵ノ戶主タル者二
 人以上ヲシテ事實ヲ証セシメ戶長郡區長與書証印ノ
 上郡區駐在官ヲ經テ府縣駐在官ニ差出シ該官ハ後備
 軍司令官ヲ經テ近衛局鎮臺或ハ鎮守府ニ申牒シ近衛
 局鎮臺ハ陸軍省ニ鎮守府ハ海軍省ニ開申ス可シ但癡

成ルヘク三月
 十日以前ニ於
 テ其師管ノ徵
 兵事務ヲ竣ハ
 ル如ク之ヲ定
 ムヘシ

疾不具等ノ者ハ陸海軍醫官ヲシテ地方醫師診斷書ノ
 當否ヲ判定セシメ又ハ府縣駐在官及ヒ其他陸海軍醫
 官ヲシテ其家ニ就キ検査セシムルコトアル可シ
 第八十七條 前條ノ者生兵或ハ二等若水兵若クハ二等
 若火夫ノ卒業後ナレハ郷里ニ歸休セシメ又卒業以前
 ナレハ之ヲ第一豫備徵員ニ編入ス
 第八十八條 近衛兵ニシテ前條ニ據リ歸休セシメ又ハ
 第一豫備徵員ニ編入スル者ハ近衛局ヨリ本籍所管ノ
 鎮臺ニ通牒シ該鎮臺ノ管理ニ屬ス可シ

○第二章
 検査

務條 第十三條
 壯丁ノ検査ヲ
 施行スル爲メ

第八十九條 現役兵在營在艦中父母ノ重病或ハ死亡等
 ニテ歸省ヲ願フトキハ其戶主又ハ親族ノ者ヨリ事實
 ヲ詳記シ(其重病ハ醫師ノ診斷書書式第五)戶長郡區長ノ

府縣管地ノ廣
狹及ヒ壯丁ノ
多寡ニ應シ集
合便宜ノ地ヲ
撰ミ若干ノ徵
兵檢査所ヲ設
ク可シ

第十四條 各府
縣徵兵區ニ於
テ其事務ヲ整
理スル爲メ毎
年新兵徵集ノ

奧書証印ヲ以テ直ニ本人所屬ノ隊或ハ鎮守府ニ願出
ルニ於テハ詮議ノ上往復ヲ除キ十四日以内ノ歸省ヲ
許ス可シ尤モ旅費ハ自辨タル可シ但生兵二等若水兵
二等若火夫ノ卒業ニ至ラス或ハ臨時ニ演習觀兵ノ舉
アルトキ又ハ航海中ハ本條ノ限ニ在ラス

〔參考〕 明治十七年一月廿八日德島縣ヨリ電報同同年
二月四日陸軍省指令

常備兵在營中家計ニ止ムヲ得サル事故ヲ生シ歸休又
ハ免役ヲ出願ノ者取扱方徵兵令改正後モ舊徵兵事務
條例第百二十一條ノ手續ニ準シ取扱可然電通信ヲ以
テ御指揮ヲ乞フ

指令(電報)

期ニ先テ府縣
廳所在ノ地又
ハ管内便宜ノ

地ニ一ノ徵兵
署ヲ設ク可シ
但一府縣ノ管
地兩師管ニ分
屬スル者ハ每
師管ニ一ノ徵
兵署ヲ設ク可シ
第十五條 徵兵
檢査所及ヒ徵

去月二十八日電報常備兵在營中家事故障ニ由リ歸休
又ハ免役出願ノ者取扱同之儀伺之通

○第九節 先入兵

〔改徵〕 第三十九條 疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入
營シ難キ者ハ其事由ヲ詳記シ其疾病ニ罹ル者ハ醫師
ノ診斷書ヲ添ヘ即日戶長ニ届出ヅ可シ其事故止ムル
亦同シ

第四十條 第三十九條ニ掲グルモノ其年九月一日ニ至
ルモ事故猶止マサルルハ之ヲ翌年廻シノ者ト爲シ翌
年更ニ檢査ヲ遂ケ他ノ徵員ニ先テ徵集ス可シ
但シ戰時若シハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ翌

兵署ハ毎年新

兵徴集中開ク

モノニシテ該

事務竣レハ之

ヲ閉ツヘシ

第三十四條 府

縣廳ニ於テハ

毎年十一月一

日ヨリ徴兵署

ヲ開設シ府縣

駐在官醫官府

縣兵事課長地

年徴集ノ期ヲ待タズ徴集ス

第四十一條

兵役ヲ免レンガ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ

作爲シ其佗詐僞ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潜匿シ

タル者又ハ正當ノ故ナク検査所ニ參會セス又ハ第三

十五條第三十六條ノ届出ヲ怠リタル者ハ抽籤ノ法ヲ

用イズ直チニ現役ニ徴集シ又ハ翌年検査ヲ遂ケ第四

十條ニ掲クル者ニ先ダチ抽籤ノ法ヲ用イズ徴集ス

〔編者曰〕 第三十五條第三十六條ハ共ニ第十二

章ニ載ス就テ知ル可シ

〔務條〕 第四百十七條 徴兵署閉鎖後徴兵令第三十六條

ニ當ル者ハ翌年之ヲ徴集ス可シ

第四百十八條 徴兵令第四十一條ニ當ル者其年疾病或

方醫員及ヒ筆

生出頭シ徴兵

検査ノ準備ヲ

爲ス可シ

第三十五條 府

縣廳ニ於テハ

各自届書人別

表其他諸書類

ノ成規ニ適ス

ルヤ否ヲ審査

シ戸籍帳ト照

較シ遺漏又ハ

ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營スルコト能ハスシテ九

月一日ニ至ルモ事故尙止マサルトハ翌年更ニ検査ヲ

遂ケ仍ホ先入兵トシテ徴集ス可シ

第四百十九條 徴兵令第四十一條ニ當ル者ニシテ爾後

同令第十七條第十八條 第四項第五項第六項及ヒ第十

九條ニ該當スト雖モ徴集猶豫ノ限ニ在ラス

〔編者曰〕 第十七條ハ第四章第五章第三章ニ第

十八條 第一項第二項ハ第七章第八章ニ第十九

條ハ第七章ニ分載ス就テ知ル可シ

〔參考〕 明治十七年四月二十三日岩手縣ヨリ電報伺同

年五月十六日陸軍省電報指令

先入兵相當ノ者検査ニ先タチ札幌縣下へ轉籍スル片

差違ナキヤ否
ヲ調査シ然ル
後徴兵署ニ送
致ス可シ
第三十六條 府
縣駐在官ハ府
縣廳ヨリ徴兵
署ニ送ル所ノ
諸書類ノ成規
ニ適スルヤ否
ヲ調査シ又壯
丁名簿壯丁異

ハ舊住地ニ呼ヒ戻シ檢査スヘキヤ將タ免役ニ屬スル
ヤ宜ク御指揮ヲ乞フ
指令(電報)
客月廿三日電報伺先入兵ニテ札幌縣下へ轉籍ノ者ハ
最密徴兵施行ノ府縣ニ於テ徴集スヘキ儀ト心得ヘシ
[參考] 明治十七年八月四日東京鎮臺ヨリ伺同月九日
陸軍省指令
徴兵事務條例第四百十九條先入兵ニシテ爾後徴兵令
第十七條第十八條第四五六八九項ヲ除ク及第十九條
ニ該當スト雖モ徴集猶豫ノ限ニ非ルヲ以テ入營ノ上
同條例第八十五條但書ニ當ル事故ヲ生シ一家ノ生計
ヲ營ム能ハサル者ハ飯休等ノ詮議ニ及ホサル儀ト

動名簿中徴集
ニ應ス可キ者
ノ總人員ヲ營
所後備軍司令
官ニ差出ス可
シ但營所後備
軍司令官ハ之
ヲ一師管ニ取
纏メ鎮臺後備
軍司令官ヲ經
テ鎮臺司令官
ニ呈ス可シ

心得可然哉此段相伺候也
指令
伺之通
[參考] 明治十七年七月十日陸軍省ヨリ伺同年八月二
十六日太政官指令ノ内
第八 徴兵令第十七條第十八條第十九條若クハ第二
十一條ノ名稱ヲ有スル者ト雖モ同令第三十五條第
三十六條ノ届出ヲ怠リタルトキハ同令第四十一條
ニ據リ抽籤ノ法ヲ用ヒテ徴集スル儀ニ候哉
指令
第八 伺之通

第三十七條 府

縣駐在官ハ前

條書類調査ノ

後府縣兵事課

長ト商議シ管

地ノ廣狹及ヒ

壯丁ノ多寡ニ

應シ検査所並

ニ巡廻日割ヲ

定メ其表面第

一書ヲ製シ後

備軍司令官ヲ

○第二章 禁役免役

○第一節 禁役

〔改徴〕 第七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ兵役ニ服

スルコトヲ許サス

〔刑法〕 第三十一條 剝奪公權ハ左ノ權ヲ剝奪ス

五兵籍ニ入ルノ權

〔參考〕 明治十七年七月十日陸軍省ヨリ伺同年八月二

十六日太政官指令ノ内

第九 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ徵兵令第七條ニ

據リ兵役ニ服スルコトヲ許サ、ル儀ニ候處舊刑法

ニ據リ懲役一年以上及ヒ國事犯禁獄一年以上實決

ノ刑ニ處セラレタル者ハ明治十四年十二月第八十

經テ鎮臺司令

官ニ府縣兵事

課長ハ府知事

縣令ニ之ヲ開

申ス可シ

第卅八條 検査

所並ニ巡回ノ

日割已ニ定マ

ル片ハ府縣廳

ヨリ郡區長及

ヒ戸長ニ達シ

戸長ハ之ヲ其

一號布告新舊比較ニ照シ重罪ノ刑ニ當ルモノニ非
サレハ凡テ徵集ス可キ儀ニ候哉

指令

第九 伺之通

○第二節 免役

〔改徴〕 第十六條 兵役ヲ免除スルハ癡疾又ハ不具等ニ

シテ徵兵検査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘザル者ニ限ル

巨村内検査ヲ
受ク可キ者ニ
達シ置キ徵集
ノ日時ニ至レ
ハ壯丁ヲ引纏
メ指定ノ場所
ニ出頭ス可シ

第卅九條 府縣
兵事課長ハ徵
兵署ニ於テ筆
生ヲ人別表
ニ基キ検査表

○第三章 戸主

○第一節 純粹ノ戸主

○第一款 猶豫

改徵 第十七條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ猶豫ス

但シ其年補充員不足ナルトキ又ハ戰時若クハ事變
ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第五項 戸主

務條 第三百十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條

及ヒ第二十一條ニ當リタル者七箇年間ニ其資格ヲ失
ヒタルトキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ
第十八條第七項ニ當ル者并ニ陸海軍生徒トナル者ハ
徵集猶豫ニ屬ス可シ

第十二
書式
ヲ製セ
シメ検査ノ席
ニ備ヘ置ク可
シ但検査表用
紙ハ検査ノ季
節ニ先テ府縣
廳ヨリ之ヲ徵
兵器ニ送ルヘシ

第四十條 壯丁
中疾病處刑又
ハ逃亡失踪等
ニテ検査所ニ

参考

明治十七年七月十日陸軍省ヨリ同同年八月二
十六日太政官指令ノ内

第六 家族ヲ有スル戸主失踪五箇年ヲ經過シ其跡ヲ
繼キタル戸主ハ徵兵令第十七條第五項ニ據リ徵集
猶豫ニ屬スルハ勿論ニ候處全家失踪又ハ單身ノ戸
主ニテ失踪五箇年ヲ經過シ其跡ヲ繼キタル戸主ト
雖モ均シク徵集猶豫ニ屬ス可キ儀ニ候哉

第十 重罪ノ刑ニ處セラレタルヲ以テ戸主若クハ嗣
子承祖ノ孫相續人等ヲ罷メ其跡ヲ繼キタル戸主若
クハ更定ノ嗣子承祖ノ孫ハ徵兵令第十七條第三項
若クハ第五項ニ據リ徵集猶豫ニ屬スル儀ニ候處舊
刑法ニ據リ懲役終身又ハ禁錮終身ノ刑ニ處セラレ

出頭セサル者
 アルトキハ戸
 主或ハ親族ノ
 者ヨリ逃亡失
 踪等ノ者ハ其
 事由書ニ戸長
 ノ奥書証印憲
 兵部若クハ警
 察署ノ証認ヲ
 受ケ疾病ノ者
 ハ醫師ノ診断
 書第五處刑中

戸主嗣子承祖ノ孫若クハ相續人ヲ罷メ其跡ヲ繼キ
 タル戸主又ハ嗣子承祖ノ孫亦同様處分ス可キ儀ニ
 候哉

指令
 第六第十 伺之通

○第二款 非猶豫

改徵 第二十二條 左ニ掲グル者ハ第十七條ニ照シテ
 徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第七項 年齢六十歳未満ノ者癡疾又ハ不具等ニシテ
 一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ
 刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼

ノ者ハ刑名宣
 告書寫ヲ以テ
 郡區長ヲ經テ
 徵兵検査所ニ
 届出可シ但起
 居自在ナラサ
 ル疾患ニシテ
 車駕等ヲ用フ
 ルモ出頭スル
 能ハサル者ハ
 其家ニ就キ之
 チ検査シ若ク

ギタル戸主

第八項 嗣子承祖ノ孫又ハ相續人癡疾又ハ不具等ニ
 シテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重
 罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ノ死亡跡若
 クハ戸主ヲ罷メタル跡ヲ繼カス他ノ者ニシテ其跡
 ヲ繼キタル戸主

第九項 戸主失踪シテ五個年ヲ經ザル者ノ跡ヲ繼ギ
 タル戸主

務條 第二百二十四條 徵兵令第十七條ニ當ル者ヲ徵集
 スルトキハ其項目ノ順序ニ從フ可シ

參考 明治十七年八月九日新潟縣ヨリ伺同年同月十
 九日陸軍省指令

ハ他ノ検査所ニ出頭セシムル等府縣駐在官府縣兵事課長商議シテ之ヲ處分ス可シ

第四十一條 徵

兵検査所ニ於テ收領スル所ノ諸願届書ハ府縣駐在官府縣兵事課長ト

夫死亡シ男子ナク一時已ムヲ得テ寡婦又ハ女子戸主トナリ該戸主へ入婿戸主トナル者ト雖モ令第二十二條第七項ニ依リ猶豫ノ限リニ無之儀ト心得可然哉指令
書而女戸主年齢六十歳未満ナルハ伺之通

○第二節 各種戸主

○第一款 猶豫

〔務條〕 第二百二十五條 附籍戸主及ヒ其嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵兵令第二十二條第一項ニ據リ徵集スト雖モ其戸主徵集各自届出期限即チ九月十五日以前ニ一戸ヲ設立スルトキハ徵兵令第十七條第三項及ヒ第五項ニ

商議シ之ヲ處分シ壯丁名簿壯丁異動名簿ニ訂正ヲ加ヘ若シ處分スルコト能ハサルモノ或ハ成規外ニ係ルモノハ意見書ヲ添ヘ之ヲ巡行ノ後備軍司令官ニ差出ス可シ

據リ徵集猶豫ニ属ス可シ但分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主ニシテ更ニ附籍シタル後別ニ一戸ヲ設立スルモ本條ノ限ニ在ラス
第四百十條 徵兵令第二十二條第二項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ其第六項ニ據リ戸主トナリタル者及ヒ其第七項ノ戸主ハ徵集スト雖モ其徵集ニ應スヘキ年ノ一月迄ニ前戸主同戸籍中ノ者已ニ六十歳ニ至ルカ又各自届出ヲ爲ス年ノ九月十五日迄ニ癡疾又ハ不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶豫ニ属ス可シ

〔參考〕 明治十七年七月十日陸軍省ヨリ伺同年八月ニ

第四十二條 檢

查ハ概テ十一月十日ヨリ始メ第三十四條ニ掲クル所ノ諸員徴兵檢査所ヲ巡行シ其事務ヲ調理ス

第四十三條 戶

長ヨリ檢査ノ達ヲ受ケタル者ハ戶長ニ從

十六日陸軍省指令ノ内

第五 癡疾不具重罪ノ事故アル戶主其嗣子承祖ノ孫ヲ癡疾不具重罪等ノ事故ナクシテ之ヲ廢シ更ニ定メタル嗣子承祖ノ孫ニ戶主ヲ讓リシトキ其戶主タル者徴集猶豫ニ屬スル哉

指令

第五 伺之通

○第二款 非猶豫

改徵 第二十二條 左ニ掲クル者ハ第十七條ニ照シテ徴集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第一項 附籍戶主及ヒ附籍戶主ノ嗣子或ハ承祖孫

ヒ指定ノ日時

ニ其場所ニ出

頭シ府縣駐在

官府縣兵事課

長ノ面前ニ於

テ身體ノ檢査

ヲ受ク可シ

第四十四條 身

體檢査ヲ爲ス
トキハ郡區駐
在官郡區長列
席シ郡區駐在

第四項 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戶

主及ヒ其戶主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第六項 第二項第三項第四項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ

孫ニシテ戶主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ

營ムコト能ハザルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレ

タルニ非ズシテ戶主ヲ罷メ其跡ヲ繼ギタル戶主

編者曰 第二項ハ第五章ニ第三項ハ第五章ニ

載ス就テ知ル可シ

務條 第二百二十四條 徴兵令第十七條ニ當ル者ヲ徴集

スルトキハ其項ノ順序ニ從フ可シ

○第四章 兄弟

○第一節 猶豫

改徵 第十七條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ猶豫ス

但シ其年補充員不足スルトキ又ハ戰時若クハ事變

ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第一項 兄弟同時ニ徵集ニ應スル者ノ内一人及ヒ現
役兵ノ兄或ハ弟一人

第二項 現役中死没又ハ公務ノ爲メ負傷シ若クハ疾
病ニ罹リ免役シタル者ノ兄或ハ弟一人

務條 第二百二十五條 徵兵令第十七條第一項及ヒ第二
項ノ兄弟ハ同戶籍中ノ實兄弟ニ限ル

第二百二十六條 徵兵令第十七條第一項ノ兄弟同時徵集

官ハ壯丁名簿
壯丁異動名簿
中徵集ノ部ニ
記載シタル順
序ニ壯丁ヲ呼
出シ醫官ハ徵
兵検査規則ニ
據リ體格ヲ檢
査シ合格ノ者
ハ更ニ其體格
ノ等位ヲ區別
ス不合格ノ者

及ヒ身幹四尺

九寸未滿ノ者

ハ地方醫員ヲ

シテ之ヲ検査

表ニ記註セシ

メ醫官之ニ捺

印シテ府縣駐

在官ニ差出ス

可シ但四尺九

寸未滿ノ者及

ヒ不合格者ノ

骨相ハ検査表

ニ當リ検査ノ上共ニ合格スルトキ情願ニ據リ一人ヲ
猶豫ス可シ

前項ノ者他府縣ニ寄留シ該地ニ於テ検査ヲ受ケント
欲スルトキハ各自届出ヲ爲ス年ノ八月十五日迄ニ其

旨ヲ寄留地戶長ニ願出本籍戶長ニ届出可シ

第二百二十八條 豫備兵後備兵召集中死没又ハ公務ノ爲

メ負傷シ若クハ疾病ニ罹リタル者ノ兄弟徵集ニ當ル

トキハ徵兵令第十七條第二項ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス

可シ

第三百三十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第

二十一條ニ當リタル者七個年間ニ其資格ヲ失ヒタル

トキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ第十八

ニ記註スルヲ
要セス唯其尺
度並ニ骨相ノ

部ニ主任ノ醫
員捺印ス可シ

第四十五條 壯

丁ノ身體検査
終ル毎ニ府縣

駐在官ハ府縣
兵事課長ト共

ニ人別表ニ據
リ本人ニ姓名

條第七項ニ當ル者并ニ陸海軍生徒トナル者ハ徵集猶
豫ニ屬ス可シ

○第二節 非猶豫

務條 第二百二十四條 徵兵令第十七條ニ當ル者ヲ徵集
スルトキハ其項目ノ順序ニ從フ可シ

第二百二十七條 武官并ニ陸海軍生徒ノ兄弟ハ徵兵令第
十七條第一項第二項ニ據ルノ限ニ在ラス

第二百二十九條 徵兵令第十七條第一項ノ現役兵ノ兄或
ハ弟一人ハ徵集ヲ猶豫スヘシト雖モ現役中ノ者其年
四月現役滿期或ハ脱走中又ハ歸營償勤中ナルトキハ
徵集ニ應ス可シ

住所族職業父

兄ノ姓名等相

違ナキヤ否ヲ

尋問ス可シ

第四十六條 人

別表調査ノ後

府縣駐在官ハ

検査表ニ據リ

筆生ヲシテ人

別表中身幹尺

度ノ區畫ニ各

自ノ寸尺ヲ記

○第五章 嗣子承祖ノ孫

○第一節 猶豫

改徵 第十七條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ猶豫ス

但シ其年補充員不足スルトキ又ハ戰時若クハ事變

ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第三項 戶主年齡滿六十歳以上ノ者ノ嗣子或ハ承祖

ノ孫

第四項 戶主癱疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營

ムコト能ハサル者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

務條 第三百三十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條

及ヒ第二十一條ニ當リタル者七個年間ニ其資格ヲ失

ヒタルトキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ

註セシメ又疾病缺損又ハ身

第十八條第七項ニ當ル者并ニ陸海軍生徒トナル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

幹四尺九寸未

第三百三十七條

附籍戸主及ヒ其嗣子或ハ承祖ノ孫ハ徵

滿ノ者ノ備考

兵令第二十二條第一項ニ據リ徵集スト雖モ其戸主徵

區畫ニハ何ノ

集各自届出期限即チ九月十五日以前ニ一戸ヲ設立ス

事故ニ付徵集

ルトキハ徵兵令第十七條第三項及ヒ第五項ニ據リ徵

猶豫、疾病、飲

集猶豫ニ屬ス可シ但シ分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ

損ニ付除役等

再興シタル戸主ニシテ更ニ附籍シタル後別ニ一戸ヲ

其要領ヲ記註

設立スルモ本條ノ限ニ在ラス

セシム可シ

第三百三十八條

徵兵令第廿二條第四項ノ嗣子或ハ承祖

第四十七條 壯

ノ孫ハ徵集スト雖モ其戸主分家又ハ絶家廢家再興後

丁中癩癩、狂病

廢疾不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル時又

白痴、夜盲、聾

ハ重罪ノ刑ニ處セラレタル時ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

啞遺尿等ノ如

第三百三十九條 徵兵令第二十二條第二項ノ嗣子或ハ承

キ疾病アリ其

祖ノ孫ハ徵集スト雖モ各自届出チ爲ス年ノ九月十五

狀ヲ申告セン

日迄ニ前嗣子承祖ノ孫若クハ相續人同戸籍廢疾又ハ

トスル者ハ平

不具等トナリ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊

素其病狀ヲ熟

シキトキ又ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ徵集猶

知スル近隣ノ

豫ニ屬ス可シ

戸主二人以上

〔參考〕 明治十七年一月廿八日岡山縣ヨリ伺同年二月

ノ証書ヲ添テ

六日陸軍省電報指令

檢査所ニ申出

改正徵兵令第十七條第三項ニ養子養孫ハ含蓄セサル

可シ醫官ニ於

ヤ若含蓄セサルキハ相續人ハ如何心得ヘキヤ且同令

テ相違ナシト

改正前戸主トナル者ハ父六十歳未滿ナルモ猶豫ニ屬

認定スルトキ
ハ之ニ與書証
印ス可シ若シ
認定スルコト
能ハサルトキ
ハ府縣駐在官
ニ致ス可シ駐
在官ハ之ヲ徵
集ノ部ニ加フ
可シ

第四十八條 壯
丁ノ身體検査
スルヤ併セテ御指揮アリタシ
指令

去月廿八日電報伺前段改正徵兵令十七條三項ハ養嗣
子養承祖ノ孫モ中段相續人ハ猶豫ニ屬セス後段十七
年一月以後滿二十歳トナル者ハ戸主トナル日改正ノ
前後ヲ問ハス総テ新令ニ據リ處分スル儀ト心得ヘシ

〔參考〕 明治十七年七月十日陸軍省ヨリ伺同年八月二
十六日太政官指令ノ内

第十 重罪ノ刑ニ處セラレタルヲ以テ戸主若クハ嗣
子承祖ノ孫相續人等ヲ罷メ其跡ヲ繼キタル戸主若
クハ更定ノ嗣子承祖ノ孫ハ徵兵令第十七條第三項
苦クハ第五項ニ據リ徵集猶豫ニ屬スル儀ニ候處舊

終ル毎ニ府縣
駐在官ハ府縣
兵事課長ト共
ニ合格又ハ不
合格或ハ徵集
猶豫ノ要領ヲ
壯丁名簿壯丁
異動名簿中ノ
各自姓名ノ頭
ニ記註ス可シ

第四十九條 身
體検査終リタ

刑法ニ據リ徵役終身又ハ禁錮終身ノ刑ニ處セラレ
戸主嗣子承祖ノ孫若クハ相續人ヲ罷メ其跡ヲ繼キ
タル戸主又ハ嗣子承祖ノ孫亦同様處分ス可キ儀ニ
候哉

指令

第十 伺之通

○第二節 非猶豫

〔改徵〕 第二十二條 左ニ掲クル者ハ第十七條ニ照シテ
徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第一項 附籍戸主及ヒ附籍戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫
第二項 廢疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコ

ル後郡區長ハ
合格者ヲシテ
抽籤總代人ヲ
撰ハシメ其姓
名住所ヲ府縣
兵事課長ニ通
牒ス可シ

第五十條 府縣
駐在官ハ人別
表備考區畫ヲ
案シ訂正ヲ加
フ可キモノハ

ト能ハザルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ
非ズシテ嗣子承祖ノ孫若シハ相續人ヲ罷メ更ニ定
メタル嗣子承祖ノ孫

第三項 年齡六十歲未滿ノ戶主癡疾又ハ不具等ニシ
テ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハザルニ非ズ或ハ重罪
ノ刑ニ處セラレタルニ非ズシテ戶主ヲ罷メ年齡六
十歲以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼ギタル戶主ノ嗣子或
ハ承祖ノ孫

第四項 分家シ又ハ絶家若シハ廢家ヲ再興シタル戶
主及ヒ其戶主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 嗣子承祖ノ孫失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ
跡ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

之ヲ加ヘ醫官
ニ謀リ身體最
モ健全ニシテ
近衛兵ニ適當
スト思考スル
モノハ人別表
備考區畫ニ近
衛何兵適當ノ
文字ヲ記註ス
可シ

第五十一條 府
縣駐在官ハ壯

務條 第二百二十四條 徵兵令第十七條ニ當ル者ヲ徵集
スルトキハ其項目ノ順序ニ從フ可シ

參考 明治十七年七月十日陸軍省ヨリ伺同年八月二
十六日太政官指令ノ内

第一 年齡六十歲未滿ノ戶主癡疾又ハ不具等ニシテ
一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ
刑ニ處セラレタルニ非ズシテ戶主ヲ罷メ年齡六十
歲以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戶主ノ嗣子承祖
ノ孫ハ徵兵令第二十二條第三項ニ據リ徵集猶豫ニ
屬セサル儀ニ候處右嗣子承祖ノ孫ハ假令徵集ニ應
ス可キ年ノ一月ニ至リ戶主ヲ罷メタル者已ニ六十
歲ニ至リ或ハ六十歲未滿ト雖モ各自届出ヲ爲ス年

丁ノ職業ニ注
 意シ海軍兵ニ
 適當スト思考
 スルモノハ人
 別表備考區畫
 ニ海軍何兵適
 當ノ文字ヲ記
 註ス可シ

ノ九月十五日迄ニ癘疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生
 計ヲ營ムコト能ハサル者ニ齊シキ又ハ重罪ノ刑ニ
 處セラレタルトキト雖モ徵集猶豫ニ屬セサル儀ニ
 候哉

第二 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主
 ノ嗣子承祖ノ孫ハ徵兵令第二十二條第四項ニ據リ
 徵集猶豫ノ限ニアラサルヲ以テ右嗣子承祖ノ孫ニ
 シテ失踪五ケ年ヲ經過スルモ跡ニ定メタル嗣子承
 祖ノ孫ハ同令第十七條第三項ニ據ルノ限ニアラス
 徵集ス可キ儀ニ候哉

第三 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主
 ハ徵兵令第二十二條第四項ニ據リ徵集猶豫ノ限ニ

第五十二條 府

縣駐在官ハ合
 格者ノ人別表
 及ヒ檢査表ニ

照シ各自ノ身
 材藝能職業ニ
 應シ豫メ兵種
 ナ區別ス可シ

第五十三條 近

衛諸兵ハ總テ
 品行方正ニシ
 テ且體格最健
 全ナル者ヨリ
 之ヲ撰フ可シ
 其身幹砲兵ハ
 五尺五寸以上

アラス且此戸主ハ年齢六十歳前後ヲ問ハサルヲ以
 テ右戸主失踪シテ五ケ年ヲ經過スルモ跡ヲ繼キタ
 ル戸主ハ同令第十七條第五項ニ據ルノ限ニアラス
 徵集ス可キ儀ニ候哉

第四 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主
 癘疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハ
 サルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシ
 テ戸主ヲ罷メ年齢六十歳以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼
 キタル戸主ノ嗣子承祖ノ孫ハ別ニ明文無之候共其
 實徵兵令第二十二條第三項ニ當ル嗣子承祖ノ孫ト
 毫モ異ナラサルヲ以テ均シク徵集猶豫ニ屬セサル
 儀ニ候哉

步兵騎兵工兵

ハ五尺三寸以

上ノ者タル可

シ

第五十四條 鎮

臺ニ屬スル諸

兵ノ身幹砲兵

ハ五尺五寸以

上歩兵騎兵工

兵輜重兵ハ五

尺三寸以上ノ

者タル可シ若

指令

第一第二第四 伺ノ通

第三共嗣子若クハ承祖ノ孫ニシテ跡ヲ續キタルトキ
ハ徵兵令第十七條第五項ニ屬シ其他ノ者ニシテ跡ヲ
續キタルトキハ伺ノ通

○第六章 失踪逃亡

〔参考〕

明治十七年七月十日陸軍省ヨリ伺同年八月二
十六日太政官指令ノ内

第七 失踪トハ規避ノ確証ナク其居處分明ナラサル
者逃亡トハ規避シテ其踪跡ヲ韜晦スル者ヲ稱スル
儀兼テ當省質義舊法制部ノ説明有之候處徵兵令第
二十二條第五項第九項ノ失踪ニハ逃亡ハ含蓄セル
儀ニ候哉

指令

第七失踪ト逃亡ハ區分アルモノニシテ規避ノ確証ナ
クシテ其居所分明ナラサル者ヲ失踪トシ規避シテ其
踪跡ヲ韜晦スル者ヲ逃亡トシテ處分可致儀ト可心得

シ不足スルト

キハ砲兵ハ五

尺四寸以上歩

兵騎兵工兵輜

重兵ハ五尺二

寸以上ノ者ヲ

以テ之ニ充テ

仍ホ不足スル

トキハ臨時其

定尺ヲ減スル

コトアル可シ

第五十五條 陸

軍雜卒又ハ職事

工トシテ徵集

スル者ハ身幹

五尺以上ニシ

テ雜卒又ハ職

工ノ勤務ニ適

當ノ者ヨリ之

ヲ撰フ可シト

雖モ若シ所要

ノ人員不足ス

ルトキハ其體

格五種兵ニ亞

○第七章 教員生徒

○第一節 猶豫

〔改徵〕第十八條 左ニ掲クル者ハ其事故ノ存スル間徵

集ヲ猶豫ス

第二項 官立府縣立學校(小學校ヲ除ク)ノ卒業證書ヲ

所持スル者ニシテ官立公立學校教員タル者

第三項 官立大學校及ヒ之ニ準ズル官立學校本科生

徒

第四項 陸海軍生徒海軍工夫

第七項 學術修業ノ爲メ外國ニ寄留スル者

第十九條 官立府縣立學校(小學校ヲ除ク)ニ於テ修業一

箇年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ハ六箇年以内徵集ヲ

ク者又ハ身幹
四尺九寸以上

ニシテ各其勤

務ニ堪フ可キ

者ヨリ之ヲ撰

フ可シ

第五十六條 海

軍兵ハ左ニ掲

クル項目ノ順

序ニ從ヒ之ヲ

撰フ可シ其身

幹水兵火夫ハ

五尺以上ヲ定

尺トス

第一項 航海

學文ハ機關

學卒業ノ者

第二項 西洋

形船舶ニ乘

組ノ者

第三項 瀛車

或ハ諸製造

所等ニ於テ

機關手又ハ

猶豫ス

〔編者曰〕學校生徒ニ關シテハ徵兵令第十一條ニ一年志願兵ノ事アリ第十二條ニ歸休ノ事アルモ第十一條ハ第一章第七節第一款ニ第十二條ハ第一章第八節ニ載セタルヲ以テ今茲ニ復出セス就テ知ルベシ

〔務條〕

第二百二十三條 徵兵令第十一條及ヒ第十八條第二項ノ卒業證書ハ學期二個年以上ノ學校ニ於テ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル證書ニ限ル

第一百三十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二十一條ニ當リタル者七個年間ニ其資格ヲ失ヒタルトキハ徵集スト雖トモ更ニ徵兵令第十七條及ヒ第十

火夫ノ業ニ

從事スル者

八條第七項ニ當ル者并ニ陸海軍生徒トナル者ハ徵集猶豫ニリス可シ

第四項 現ニ

前諸項ノ職

業ニ從事セ

スト雖モ一

箇年以上異

テ之ニ從事

セシ者

第五項 日本

形五百石以

上ノ船舶ニ

第一百三十一條 各自届出後即チ九月十六日以後ニ於テ徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項陸海軍生徒ヲ除ク第十九條及ヒ第二十一條ニ當ルモ徵集猶豫ノ限ニ在ラスト雖モ翌年四月十一日以後九月十五日迄ニ該條項ノ名稱ヲ得タル者ハ徵集猶豫ニ属ス可シ

第一百三十二條 徵兵令第十八條第三項ノ生徒ニシテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ同令第三十一條ニ據リ第一豫備徵員ニ編入ス可キヲ以テ徵兵検査時限ニ至リハ那區長ヨリ其學校ニ通牒シ最密ノ徵兵検査所ニ出頭セシメ身體ノ検査ヲ受ケシム可シ

乗組ノ者

第三百三十三條

第六項 日本

徵兵令第十八條第三項ニ掲ケタル官立
大學校ニ準スル官立學校ハ左ノ如シ

形五百石未

一 工部大學校

滿ノ船舶ニ

二 農商務省駒場札幌農學校

乗組ノ者

三 司法省法學校

第五十七條 海

第三百三十五條 徵兵令第十九條ニ掲クル修業一個年以

軍職工トシテ

上ノ課程ヲ卒リタル生徒トハ該校ニ於テ其課程ヲ卒

徵集スル者ハ

リタル者ノミニ限ラス他ノ學校ヨリ入學シ一個年以

身幹四尺九寸

上ノ課程ヲ卒リタル生徒ニ編入セラレタル者亦該條

以上ニシテ其

ニ據リ徵集猶豫ニ屬ス可シ

勤務ニ適當ノ

〔達〕明治十七年八月二十五日陸軍省甲第三十七號達

者ヨリ之ヲ撰

農商務省所轄東京商船學校生徒ノ儀ニ付太政官ヨリ別

フ可シ

紙之通御達相成候條爲心得此旨相達候事

第五十八條 兵

(別紙)

種ノ區別已ニ

陸 軍 省

竣レハ府縣駐

農商務省所轄東京商船學校生徒ノ儀ハ海軍豫備員志願

在官ハ府縣兵

者ニ限ルヲ以テ徵兵令第十八條第四項海軍生徒ニ準シ

事課長ト共ニ

候條此旨相達候事

壯丁名簿壯丁

明治十七年八月十一日

太政大臣三條實美

異動名簿人別

表檢査表其他

○第二節 召集セラレ、コナキ者

一切ノ書類ヲ

〔改徵〕第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備

取纏メ巡行ノ

兵ニ在ルトヲ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナ

後備軍司令官

シ

ニ差出ス可シ

陸務第七項

徵兵検査所ハ

務メテ壯丁遠

路往復滞在等

ノ費用ヲ省畧

スルカ爲メ一

ケ所概テ二百

人乃至五百人

ノ見込ヲ以テ

之ヲ設クヘシ

第八項 徵兵檢

但シ戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經テ召集スルコトアル可シ

第三項 官立公立學校教員

查所ハ壯丁ヲシテ裸体ナラシメ全体ヲ検査シ四支ノ運動ヲ爲サシムルヲ以テ官舎或ハ社寺等ノ廣潤ニシテ能ク光線ヲ引キ且温暖ナル適當ノ家屋ヲ撰ヒ之ニ充ツヘ

第八章 官吏教導職

○第一節 官吏

○第一款 猶豫

改徵 第二十一條 官省院廳府縣ニ於テ餘人ヲ以テ代フ可ラザル技術ノ職ヲ奉ズル者ハ太政官ノ決裁ニ依テ徵集ヲ猶豫スルコトアル可シ

務條 第三十條 徵兵令第十七條第十八條第十九條及ヒ第二十一條ニ當リタル者七個年間ニ其資格ヲ失ヒシルトキハ徵集スト雖モ更ニ徵兵令第十七條及ヒ第十八條第七項ニ當ル者并ニ陸海軍生徒トナル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ 第三百三十一條 各自届出後即チ九月十六日以後ニ於テ

第九項 壯丁ノ
身体検査ノ上
合格者ノ等位
ヲ甲乙ノ二種
ニ區別シ体格
強壯ノ者ヲ甲
種トシ体格甲
種ニ亞キ五種
兵ニ適セサル
モノヲ乙種ト
スヘシ

徵兵令第十八條第一項第二項第三項第四項
第十九條及ヒ第二十一條ニ當ルモ徵集猶豫ノ限ニ在
ラスト雖モ翌年四月十一日以後九月十五日迄ニ該條
項ノ名稱ヲ得タル者ハ徵集猶豫ニ屬ス可シ

○第二款 召集スルコトナキ者

〔改徵〕第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備
兵ニ在ルトヲ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナ
シ

但シ戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經
テ召集スルコトアル可シ

第一項 官吏(判任以上)及ヒ戶長

第十項 砲兵ニ
編入スヘキ者
ハ体格最健全
ニシテ視力清
明ナル者ヨリ
之ヲ撰フヘシ
第十一項 騎兵
ニ編入スヘキ
者ハ成ルヘク
資質敏捷ニシ
テ馬匹ヲ使用
スルニ慣レ其

〔務條〕第三百三十六條 官吏(判任以上)及ヒ戶長ハ徵兵令第二
十條第一項ニ據リ召集ヲ猶豫スト雖モ準官吏ハ該條
項ニ據リ召集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

○第二節 教導職

○第一款 猶豫

〔改徵〕第十八條 左ニ掲グル者ハ共事故ノ存スル間徵
集ヲ猶豫ス

第一項 教正ノ職ニ在ル者

○第二款 召集スルコトナキ者

〔改徵〕第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備

体格ハ筋肉肥
 満ニ過キス又
 瘦瘠ニ失セス
 上体ト下体ト
 ナ比較シテ股
 脚稍長キ者ヨ
 リ之ヲ撰フヘ
 シ
 第十二項 工兵
 ニ編入スヘキ
 者ハ成ルヘク
 木工石工竹工

兵ニ在ルトナ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナ
 シ
 但シ戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經
 テ召集スルコトアル可シ
 第二項 教導職(試補ヲ除ク)

○
 [編者第二節ニ付テ曰] 本年八月十一日太政官
 第十九號布達ニテ神佛教導職ヲ廢セラレタレ
 ドモ同年八月十一日太政官第六十八號達及ヒ
 第六十九號達及ヒ第七十號達ニテ從前教導職
 タリシ者ノ身分ハ其住職ノ時ノ等級ニ準ズル
 モノトセラレタルカラハ改正徵兵令ノ本條モ

船工車工鍛工
 鞆工桶工泥工
 馬具職屋根職
 茅屋根職木挽
 職指物職建具
 職穴藏職井戸
 堀職棒削職飾
 職杣職舟夫等
 ヨリ之ヲ撰フ
 ヘシ
 第十三項 輜重
 兵ニ編入スヘ

亦タ廢セラレタルニハ非ザルベシト思料シ以
 テ本節ニ載セタリ

第九章 府縣會議員及醫師

○第一節 府縣會議員

キ者ハ成ルヘ
シ馬匹ヲ使用
スルニ慣レ且
讀書算術ヲ爲
シ得ル者ヨリ
之ヲ撰フ可シ

改徵 第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備

兵ニ在ルトヲ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナ
シ

第十四項 歩兵
ニ編入スヘキ
者ハ職業又ハ
技能ノ有無ヲ
問ハス身体輕
捷ニシテ銃器

但シ戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經
テ召集スルコトアル可シ

第四項 府縣會議員

者ハ職業又ハ
技能ノ有無ヲ
問ハス身体輕
捷ニシテ銃器

○第二節 醫師

問ハス身体輕
捷ニシテ銃器

改徵 第二十條 左ニ掲グル者ハ豫備兵ニ在ルト後備
兵ニ在ルトヲ問ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナ

ヲ執リ能ク勞

動ニ堪ユル者

ヲ採用スヘシ

第十五項 近衛

兵適當ノ者不

足スルハ其不

足ハ鎮臺諸兵

適當ノ者ヨリ

身幹体格品行

ヲ撰ミ之ヲ補

フヘシ

第十六項 雜卒

シ

但シ戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經
テ召集スルコトアル可シ

第五項 官立府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ所持シテ醫
術開業ノ者